

「収穫のために働き人を」

京都聖徒教会 船田 献一



収穫は多いが、働き人が少ない。だから、収穫の主に願って、働き人を送り出すようにしてもらいたい。

マタイ9・37〜38

前々号の佐伯修一先生の巻頭言を読んで、懐かしい思い出がよみがえりました。と言つのも、佐伯先生と同時に中高科の教師に任命されて、一緒に奉仕した学生は、私だったからです。それこそ二人共に教会学校教師の経験がなく、おまけに4月に中高科をスタートした時点では、生徒が誰もいないという状況で、いったいこれからどうなるだろうかと、不安一杯の始まりだったと記憶しています。

隔週でメッセージと司会を担当し、分級も一緒に奉仕しましたが、最初は、出席者が教師の二人だけでしたから、毎週相手の顔を見ながらの中高科でした。もともと、中高科を始めた時に、牧師から「今は人がいないけれども、何事にも備えが必要で、人を与えて下さるのは主だから」と言われ、在籍者0のスタートでした。そのような始ま

りでしたが、牧師の言葉通りに、参加者が少しずつ加えられ、一年の終わりには3名の中高生の参加者が与えられて、大いに励まされ、器を備えることができました。

それと共に、それまでは説教をお聞きして、教えられるという、ある意味で大変受け身だった聖書との関わりが、教会学校の働きに参加することで前向きな、より積極的な者へ変えられたことは恵みでした。特に、牧羊者の存在は、中高科を導くために、聖書と共に大切な必読書となりました。未熟で、欠けの多い者が楽しく中高科に取り組むことが出来たのは、牧羊者に示されたメッセージと解釈、研究資料にいつも学び、取り扱われ、恵まれたからでした。

今、多くの教会で生徒数が減っていますが、教師の減少はそうでもありません。これは、とても価値ある事ではないでしょうか。イエス様が問題視されたのは、実った収穫物を刈り入れる働き人が少ない事でした。今は教会に人がいなくても、町の中には、幼子や少年たちを含めた主の民が大勢います。人を与えられるのは主です。その日に備えて、現職の教師と共に、さらに若い働き人が加えられ、整えられますように。各々の教会学校の祝福を祈りつつ。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「聖書の歴史的背景 ―CS教師として、知っておきたい基礎知識―」	4
キリストの宣教	15
黙示録	45
クリスマス・年末	57
牧羊ひろば（舞鶴福音教会）	93
「牧羊者」のご購読・ご利用について	98
おわりに	98

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教
団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出
版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子
どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以
上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングブレイズ）

新しい生き方

ヨハネ 13:34

●キリストの宣教

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
10月6日	ベテスダの池	ヨハネ 5:1～9	同 8 節
13日	生ける水が川 となつて	ヨハネ 7:37～39	同 38 節
20日	シロアムの池 での癒し	ヨハネ 9:1～11	同 5 節
27日	羊飼いなるキ リスト	ヨハネ 10:1～15	同 11 節
11月3日	ラザロのよみ がえり	ヨハネ 11:32～44	同 40 節

●黙示録

11月10日	バトモス島で の幻	黙示録 1:9～20	同 17・18 節
17日	神の国の完成	黙示録 21:22～22:5	同 23 節

●クリスマス・年末

11月24日	収穫感謝 宣教	ルステラでの 使徒 14:8～18	同 17 節
12月1日	アドベント 答えられた祈り	ルカ 1:57～8 6625	同 13 節
8日	ザカリヤの讃歌 すべての人を 照らす光	ルカ 1:67～80 ヨハネ 1:9～145	同 75 節 同 9 節
15日	最高のプレゼ ント	ヨハネ 3:16～21	同 16 節
22日	クリスマス 神の恵みを覚 える	詩篇 103:1～22	同 2 節
29日	年末感謝		

聖書の歴史的背景

―CS教師として、知っておきたい基礎知識―

事務局長 長田 栄一



「聖書の歴史的背景」などと言われると、「難しそう」と思われるかもしれませんが。しかし、CS教師として、毎週のクラスを準備する中で、いろいろな疑問が浮かぶと思います。「この書が書かれたのは、いつ頃なのだろう」「ダビデって、いつ頃の時代の人？」「イスラエルが南北に分かれていたのはいつ頃？」「イエス様のお働きはどれくらいの間？」「パウロやヨハネの手紙はいつ頃、どんな背景で書かれた？」などなど…。

これらの疑問を解くためには、色々な本を調べる必要があります。ごく簡単に答えが分かるものもあれば、簡単には「正解」が出てこないものもあるでしょう。ただ、日頃から、聖書の歴史的背景についての基本を押さえて

おけば、これらの疑問の多くに対して「とりあえず」の答えを出すことはできます。

「とりあえず」では満足できない、厳密な議論をしたという方は、各方面の専門書を読んで頂くしかありません。このような問題のために、専門的に研究を続けておられる方々もあるのですから、奥の深い分野でもあります。しかし、CS教師としてご奉仕を続けて頂く上で、「これ位は押さえておいて頂きたいポイント」があるのも事実です。特に、今回は、大ざっぱにはあっても、聖書全体を歴史的に正しく位置づけることを目標としながら、基本的部分に絞ってまとめてみました。ご参考になさってください。

◎旧約聖書の歴史的背景

まずは、旧約聖書の歴史的背景からです。ここでは、旧約聖書三九巻を大きく三つに分けて説明したいと思います。後ろに、「旧約聖書・歴史年表」を載せています。これを参考にしながら読まれると、分かりやすいと思います。

一、律法と歴史書

旧約聖書三九巻は、現行の日本語訳聖書の順序に従って、一般に四つに分けられます。第一は、「律法」で、創世記から申命記の五つの書。モーセが書いたと言われるので、モーセ五書とも呼ばれます。第二は、「歴史書」で、ヨシヤ記からエステル記まで。第三は、「詩歌」と呼ばれ、ヨブ記から雅歌まで。第四は、「預言書」と呼ばれ、イザヤ書からマラキ書までです。

このうち、律法（モーセ五書）と歴史書は、天地創造のはじめから、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフと

いった族長たち、続くイスラエル民族の歴史を扱っています。ですから、旧約聖書が扱う歴史を理解しようとするなら、律法と歴史書を読めば、その全体的流れを把握できることになります。

（一）律法・歴史書各巻が扱う歴史

以下、律法、歴史書の各巻が扱う歴史の範囲について、ご説明します。扱っている歴史の内容によって、便宜上、七つのグループに分けていますが、同じグループだからと言って、同じ著者であるというわけではありません。あくまでも扱っている歴史の内容による、便宜上のグループ分けとしてご理解ください。

①創世記

天地創造以下、人類のはじめの歴史が記されますが、12章以下は、特にアブラハム・イサク・ヤコブ・ヨセフといった、いわゆる族長たちの物語です。

②出エジプト記・レビ記・民数記・申命記

これら四つの書は、ヤコブの子孫がエジプトの地でイスラエルという一民族として大きくなった後、モーセに率いられ、エジプトを出てから、約束の地カナンを目前

にするとところまでの歴史を扱います。

③ヨシユア記

モーセの後継者ヨシユアの指導のもと、カナンの地に入り込んだ歴史を扱います。

④士師記・ルツ記

士師記は、ヨシユア亡き後、十二部族が周辺諸国の圧迫を受けつつ、士師と呼ばれるリーダーたちによって導かれ、助けられる歴史を扱います。ルツ記は、士師の時代の後期、ルツというモアブ人女性が、ボアズ（後にダビデの先祖となる人物）と結婚するに至る経緯を扱います。

⑤サムエル記（上・下）・列王紀（上・下）

サムエル記は、イスラエル王国形成の歴史を扱います。上巻では、サウル王の死まで、下巻では、サウルの死後、ダビデを通して王国が築かれる歴史を扱います。列王紀は、その後のイスラエル王国の歴史です。ソロモンの息子の代で、王国が南北に分かれる経緯と共に、北イスラエル王国と南ユダ王国（ダビデの子孫が王となる）の歴史が交互に記されます。特に、北イスラエルを背景にしたエリヤ（主に上巻）やエリシャ（下巻）の活躍も描か

れます。

⑥歴代志（上・下）

歴代志は、創世記から列王紀までが扱う歴史を越え、バビロン捕囚期後までを扱っています。最初の九章は、系図で、そのような歴史全体をカバーしつつ、イスラエル十二部族の広がりには焦点を当てながら記されています。その後は、ダビデ王国の形成（上巻）、ソロモン王以下、南ユダ王国の歴史（下巻）が中心に扱われています。

⑦エズラ記・ネヘミヤ記・エステル記

これら三つの書は、バビロン捕囚からエルサレムへの帰還がなされた時期を扱います。エズラ記は、第一回の帰還民による神殿再建、その少し後代のエズラによる帰還民指導の様子が扱われます。ネヘミヤ記は、エズラとほぼ同時期の人物と考えられるネヘミヤによる城壁再建の様子を中心に扱います。エステル記は、エズラ記が扱う時期と重なりますが、ペルシャ王国を舞台として、イスラエル民族滅亡の危機が、一女性エステルを通して回避される経緯を扱います。

(2) これらの歴史の流れ (まとめ)

さて、律法・歴史書の各巻が扱う歴史をもう一度振り返りながら、全体として大きな流れにまとめてみましょう。これらの歴史的区切りも、とりあえず聖書全体を整理して理解するための便宜的なものとしてご理解ください。

① 天地創造から族長たちまで

創世記で扱われます。

② 民族形成時代

出エジプトによるイスラエル民族形成から王国形成の直前まで。出エジプト記以下のモーセ五書(四巻)と、ヨシユア記、士師記、ルツ記で扱われます。

③ 統一王国時代

サウル、ダビデ、ソロモンの統一王国時代は、サムエル記、及び列王紀の最初で扱われます。また、歴代志の上と下の一部でも扱われます。年代としては、サウル王による王国成立がB C 一〇五〇年頃ですが、ダビデによる王国形成がB C 一〇〇〇年頃と覚えるのが、覚えやすいでしょう。

④ 南北分裂時代

イスラエル王国が南北に分かれ、北イスラエル王国と南ユダ王国に分かれた南北分裂時代は、列王紀と歴代志下で扱われます。但し、歴代志が扱うのは、そのうち、南ユダ王国の歴史が中心です。年代としては、アッシリヤによる北イスラエル滅亡がB C 722年頃、バビロンによるユダ王国滅亡B C 586年頃と覚えておけば便利でしょう。以後、バビロンによる捕囚の時代を迎えます。

⑤ 捕囚からの帰還の時代(ペルシャ時代)

バビロン帝国を滅ぼしたペルシャ帝国の時代は、イスラエル民族にとっては、捕囚の民の一部がエルサレムに帰還した時代でもありました。この時期は、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記によって扱われます。

二、詩歌

律法、歴史書に続く、詩歌と呼ばれるグループは、ヨブ記、詩篇、箴言、伝道の書、雅歌で、いずれも文学的な要素の強い書です。内容的に、歴史を描くことを目的とするわけではありませんし、書かれた歴史的背景も、

様々です。詩篇にはダビデの作と思われる詩が多くありますが、他の時代の人々の詩もかなり含まれます。箴言、伝道の書、雅歌は、伝統的にソロモンが書いたと考えられてきましたが、各種異論も出されています。ヨブについては、実在の人物であるのは確かですが、どういう時代の人か、諸説あって定まりません。エゼキエル書に登場するので、それ以前の人であるとしか分かりません(エゼキエル14・14)。

三、預言書

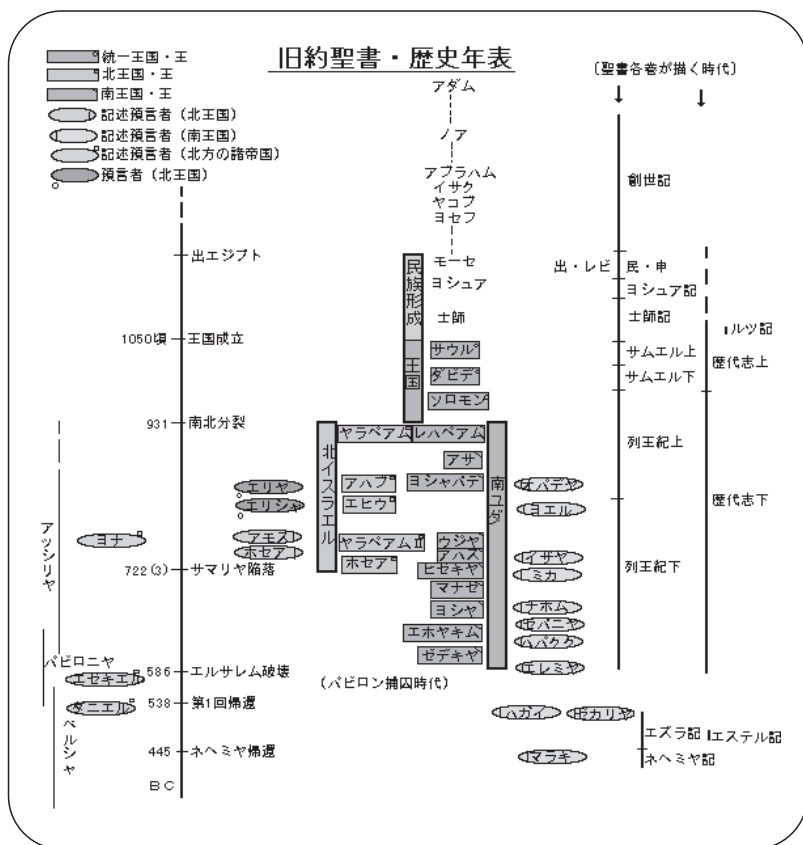
旧約聖書最後のグループ、預言書は、各時代の預言者の言葉をまとめたものです。ですから、それぞれの書をよく理解するためには、その時代の歴史的背景をよく理解することが大切です。

現在の聖書の順序では、最初に大預言書と呼ばれるイザヤ書、エレミヤ書、哀歌、エゼキエル書、ダニエル書が置かれています。これは、歴史の順序ではなく、書の長さによって最初にまとめられたものです。哀歌は伝統的にエレミヤの作と考えられたため、ここに置かれまし

た。次の十二の小預言書も、歴史的順序に並んでいるわけではありません。また、南北分裂王朝時代の預言書では、北イスラエルで活躍した預言者か、南ユダで活躍した預言者か、注意を要します。バビロンやペルシャによる捕囚時代では、預言者活動をバビロンやペルシャで行なった預言者か、エルサレム周辺で行なった預言者か、確認する必要があります。

次のページに掲載した「旧約聖書・歴史年表」は、これらの情報を一目で分かるようにまとめたものです。但し、年代については異論のあるものも沢山あります。伝統的、保守的理解による「とりあえず」のものとして、ご理解ください。

「とりあえず」ということで言えば、各預言者について細かい年代を覚えるよりも、北イスラエル滅亡以前か、それ以後、南ユダ滅亡までか、それとも捕囚期以後か、大ざっぱにでも覚えておくといいのではないでしょうか。



- 注1. この年表は、『新聖書辞典』（いのちのことば社）等を参考に、長田が作成したものです。もとは、カラーで色分けしてあるのですが、白黒となり、色による区別ができなくなっているのが残念です。カラー画像が欲しい方は、教会教育室ホームページからダウンロードできます。
2. 一番右側の「聖書各巻が描く時代」は、律法、歴史書各巻が描いている歴史年代を図示したものです。「聖書各巻が書かれた年代」ではありません。

◎新約聖書の歴史的背景

新約聖書の時代背景は、ほぼ紀元一世紀に限られています。新約聖書も、大きく二つに分けてご説明致します。

一、福音書、使徒行伝

四つの福音書は、いずれもキリストの生涯を記しています。また、使徒行伝は、キリストの復活、昇天後、弟子たちを通して地中海世界に福音が伝えられた様子が記されます。

旧約聖書に関わる歴史の流れを把握するためには、モーセ五書と歴史書を読めばよいように、新約聖書に関わる歴史の流れを把握するためには、福音書と使徒行伝を読めばよいことになります。

これらの書に記される出来事を、歴史的に整理する上で、いくつかの年代を頭に入れておくと良いでしょう。とりあえず、以下のようなポイントを押さえておけばよいのでないでしょうか。

①キリストの誕生

ご承知のように、キリスト誕生を紀元元年として作られたはずの西暦は、その後の研究によって、実際とは食い違いがあると考えられるようになりました。実際の誕生は、諸種の材料により、紀元前7～4年頃ではないかと言われています。

②キリストの伝道開始

イエス様が宣教を開始されたのは、ルカ3・23により、「年およそ三十歳の時」です。また、バプテスマのヨハネの伝道開始が「皇帝テベリオ在位の第十五年」であったというルカ3・1、2の記述より、（その解釈によって年代に幅が出ますが）紀元26・29年と考えられます。

③キリストの伝道期間

イエス様の宣教活動の期間については、およそ三年半と言われます。これは、四つの福音書を照らし合わせて考えると、イエス様の宣教活動中に、四回、過ぎ越しの祭りを迎えていることになるからです。

④キリストの死、復活、昇天

以上、②と③を合わせますと、イエス様の十字架上で死、復活、昇天は、紀元30・33年頃ということになり

ます。「とりあえず」ということでは、紀元30年頃と覚えておけばよいでしょう。

⑤ 初代教会誕生→ステパノ殉教、パウロの回心

以降は、使徒行伝によって知られる初代教会の歩みになります。

まずは、ペンテコステの日の聖霊降臨による初代教会誕生、ステパノの殉教と共に起こったクリスチャンの離散、パウロの回心といった出来事が記されます。これらの出来事は、紀元30年代と覚えておけばよいでしょう。

⑥ パウロの伝道旅行

続いて、パウロは、地中海世界一帯で三回の伝道旅行を行いました。

第一回 小アジア（使徒13・1～14・28）

第二回 小アジア→ギリシヤ（マケドニア、アカヤ）
（使徒15・36～18・22）

第三回 小アジア→ギリシヤ（マケドニア、アカヤ）
（使徒18・23～21・17）

これらの年代は、紀元40～50年代と覚えておけばよいでしょう。

新約聖書・歴史年表					
BC4	AD30	AD40	AD50	AD60	AD100
福音書が描く年代		使徒行伝が描く年代			
主な出来事	キリスト誕生	キリスト死・復活	パウロ伝道旅行		パウロ死 パウロローマ幽閉
各巻が書かれた年代		①	②	③	黙示録 I・II・IIIヨハネ I・IIペテロ 牧会書簡 獄中書簡 ローマ I・IIコリント I・IIテサロニケ

注) この年表は、『新聖書辞典』（いのちのことば社）等を参考に、長田が作成したものです。下の出来事等は、上の年号との位置関係により、おおよその年代を把握できるようにしていますが、厳密なものではありません。「パウロ伝道旅行」部分、「各巻が書かれた年代」では、第1回～第3回伝道旅行まで、拡大表示しています。

⑦パウロのローマ幽閉、死

使徒行伝の終りは、パウロのローマ幽閉で閉じられます。伝説によれば、この後パウロは一旦釈放され、スペインにまで伝道に出かけたと言います。その後再び、捕えられ、ネロ帝の迫害のもとで殉教したと言われます。ネロ帝の統治が紀元68年までなので、それまでの出来事になります。が、「とりあえず」ということでは、紀元60年代と覚えておけばいかがでしょうか。

二、手紙、黙示録

福音書と使徒行伝に、手紙と黙示録が続いています。パウロの手紙が十三、著者不明のヘブル人への手紙、ヤコブの手紙が一、ペテロの手紙が二、ヨハネの手紙が三、ユダの手紙が一、そして、ヨハネの黙示録という内訳です。

これらの手紙や黙示録を理解するためには、その手紙が書かれた執筆事情や執筆年代を考慮する必要があります。著者ごとに、そのあらましをご紹介します。

①パウロ

パウロの生涯については、「福音書、使徒行伝」ところで、あらましを紹介していますので、そちらを参照してください(⑤⑥⑦)。そのようなパウロの生涯を頭に置きながら、各手紙がパウロの生涯のどの時期に書かれたものかを考えることになります。

たとえば、『ローマ人への手紙』は、第三回伝道旅行中のコリント滞在中に書かれたと考えられます(ローマ16・23、Iコリント1・14等)。

また、『コリント人への第一の手紙』は、第三回伝道旅行でのエペソ滞在時に(Iコリント16・8等)、『第二の手紙』は、同じ第三回伝道旅行でのマケドニア滞在中に書かれたと考えられます(IIコリント7・5等)。

『ガラテヤ人への手紙』は、「ガラテヤの諸教会」(ガラテヤ1・2)をどう理解するかによって、大きく二つの見解があります。詳細は省略しますが、「北ガラテヤ説」と呼ばれる見解では、第三回伝道旅行の途中、エペソで、一方の「南ガラテヤ説」によれば、第一回伝道旅行を終えて、アンテオケに戻ったとき、あるいは、第二回伝道旅行の途中、コリントで、といった説が提案され

ています。

『テサロニケ人への第一の手紙』は、第二次伝道旅行で、パウロがテサロニケの人々に伝道した後（使徒17・1〜3）、アテネ（Iテサロニケ3・1）よりはむしろコリントで（使徒18・5、Iテサロニケ3・6）書かれたと考えられています。『テサロニケ人への第二の手紙』も、同じコリントで書かれたと考えられています。

一般に獄中書簡と言われる『エペソ人への手紙』、『ピリピ人への手紙』、『コロサイ人への手紙』、及び『ピレモンへの手紙』は、伝統的には、ローマ幽閉時（紀元60年代はじめの約二年間）に書かれたと言われます。

また、一般に牧会書簡と言われる『テモテへの第一の手紙』、『テモテへの第二の手紙』、『テトスへの手紙』は、ローマ幽閉から一時釈放された後、再び捕えられ、殉教の死を遂げるまでの間に書かれたと考えられます。

もちろん、これらの見解以外にも、各手紙の執筆年代については、多くの説が出されており、中には、「有力」と言われるような説もあるのですが、「とりあえず」ということでは、これ位の理解で十分かと思っています。

②ヘブル人への手紙

歴史的には、パウロを著者と考える人々もいましたが、それを否定する人々も昔から多くいました。ヘブル2・3からは、使徒たちから教えを受けた第二世代の人々のだれかと考えるのがよさそうです。ほぼ確実に言えることは、紀元95年までに書かれたことだけであり（その時点でのローマのクレメンスによる引用があるので）、紀元一世紀後半に書かれたであろうとしか言えません。

③ヤコブ

『ヤコブの手紙』の著者ヤコブは、「主の兄弟ヤコブ」と考えられています。彼は、紀元62年殉教しましたので、それまでに書かれたとしか分かりません。

④ペテロ

著者、使徒ペテロは、紀元64・68年のネロ帝迫害の中で殉教したと伝えられます。ペテロがローマ（Iペテロ5・13で「バビロン」と呼ばれている）で書いたとすると、紀元60年代で、パウロがローマにいなかった時期に、二つの手紙とも書かれたではないかと推測されます。

⑤ヨハネ

使徒ヨハネは、非常に高齢までエペソに住み、エペソ

で死んだと伝えられます。トラヤヌス帝の治世（紀元98～117年）まで生きていたとする伝承もあり、ほぼ紀元1世紀の終りまで生きていたと考えられます。

ヨハネが福音書を書いた年代は不明ですが、一般的には四福音書の中でも最後に書かれ、ヨハネが比較的晩年に書いたのではないかと考えられます。

また、三つの手紙についても、確定的なことは言えませんが、福音書より後、紀元90年頃書かれたのではないかとする意見が一般的です。

黙示録については、「ドミティアヌス帝の治世の終り」に書かれたとする証言もあり、紀元96年頃、パトモス島（黙示録1：9）にいる時に書かれたとするのが一般的です。

⑥ユダ

『ユダの手紙』は、「主の兄弟ユダ」が書いたと考えられます。ペテロの第二の手紙とよく似た部分が沢山あるため、一般的にはユダがペテロの手紙を見ながら書いたのではないと言われ、60年代後半以降に書かれたと考えられます。

主な参考文献

『新聖書辞典』（いのちのことば社）

『新聖書注解』（いのちのことば社）

フランシス・ブランケンベイカー『早わかり聖書ガイド

ブック』（いのちのことば社）

千代崎秀雄『聖書なるほど博物館』（講談社）

イ・エシル『おっ?!聖書が読めてくる!』

（Duranno Japan）

エドワード・ヤング『旧約聖書緒論』（聖書図書刊行会）

エヴェレット・F・ハリソン『新約聖書緒論』

（聖書図書刊行会）

〔牧羊者・二〇二二年度Ⅳ巻〕より再掲

聖書 ヨハネ5・1～9 テーマ ベテスダの池

序論

(高橋頼男)

ユダヤ人の祭りがあつて、イエスはエルサレムに登られました。しかし、イエスの足は聖なる儀式が行われているエルサレム神殿ではなく、ベテスダの池に向かいました。そこにも多くの人々が集まっていました。明らかに、そこは祭りの雰囲気とは異なつた場所でした。イエスは一人の男がもう長い間病氣なのを知り、(「なりたいのか」と問われました。彼は自分に心をかけてくれた見知らぬ人に、積もり積もつた心の内を吐き出します。しかし、イエスはそのような彼に、「起きよ、床を取りあげて歩め」(文語訳)と命じられました。すると、「この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり」(文語訳)とあるように、ただちに癒され、歩みだしたのです。

一、空しい光景、空しい宗教(2～5)

その場所は何とも言えない倦怠感、空しさと失望が漂っていました。そこには二つの池を囲むようにして五つの回廊が備えられていました。多くの病人、盲人、足

のなえた者、やせ衰えた人々が毎朝この池に連れて来てもらい、一日をただひたすら池の水の面が動くのを待って横たわっていたのです。気まぐれな天使がこの池を訪れるとき水を動かすことがあるのですが、その時真っ先に入る者は、どんな病氣にかかつていても癒されると言い伝えられていたからです(3～4節は異本による説明。新改訳第三版等では省かれている)。神殿のたいそうな祭儀やユダヤ人たちが堅く守っていた安息日律法は、池の周りの人々を癒すことも救うこともしません。彼らは一縷の望みを異教的な言い伝えに託し、それにすがるほかないというありさまで。私たちも周囲をよく見回してみましよう。私たちの宗教、私たちの礼拝が何であるかが問われ、探られているかも知れません。

二、なおりたいのか(5～9)

イエスは、三十八年の間病氣に悩んでいる人が横になつてゐるのを見られました。この人の病氣は彼の罪から来たものでした(14)。もしこの罪が大人になつてからのものなら、この人はすでに六十歳にはなつていたでしょう。生涯のほとんどをこの病氣で苦しみ、病人としての環境で過ごしてきました。イエスが問われた(「なおりた

いのか」という言葉は、病んで苦しんできた者に対する配慮を欠いた冷たい言葉のように思われます。しかし、イエスの言葉は彼を見、よく知った上での言葉です。長く病気で苦しんできた者がなりたいのはあたりまえで、そのため今日も池に来ているのです。しかし、彼の本音は別のところにあります。病人として年月をここまで重ね、今ではもう本気で治るということを考えることも出来なくなっていたのではないのでしょうか。もし、奇跡が起こり治ったとしても、今まで他人の憐れみと好意に任せて生きてきたのに、急に自立を迫られても困るという本音もあったでしょう。これまでの闘病生活のすべての涙と汗と汚れのしみ込んだ臭う床には、他人には分からない離れがたい愛着があったかもしれません。「他人が問題なのです。人に思いやりがないのです」と、自己憐憫から次々にくりだされる他者非難は、決して真剣に『自己』と対決しようとしないう人間の逃避の言葉です。イエスは、彼の弁解を無視するかのように、強い語調で彼の意思を揺り動かす言葉を語られました。「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。すると、この人はすぐにいやされ、床を取り上げて歩きだしました。

イエスは、私たちの本音を見ぬかれるお方です。私たちの他者非難と弁解を空しくし、私たちの意思を揺さぶり、私たちに本気で問い、立ち向われます。そして、私たちに力あるみ言葉を語られます。その時、私たちの内なる病は癒され、しがみついていた床は取り上げられ、新しい自立した主にある歩みを備えてくださるのです。

三、わたしも働くのである(17)

主は、安息日にこのようなことをしたと責めるユダヤ人に向かって、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」と答えられました。無力な儀式や律法ではとうてい為し得ない真の癒しと救いを成し遂げるために、イエスはみ父にならない、私も働くのだと言われました。「罪に囚われた魂をその束縛から解放し、真の安息へと招く神の働きは、休むことなく続けられています」(研究資料)。私たちもこのイエスのお働きを共に担わせていただくため、聖霊に満たされ、主の情熱を注がれ、ご奉仕に励みたいものです。

結論

きょう、私たちの信仰が問われています。主の前に立ち、主の言葉で癒され、立ちあがりましょう。

研究資料

(中島啓一)

ベテスダの池でイエスは、一人の男を長年の患いから解放された。この記事は、すぐ後に続く安息日をめぐりやりとり(10→18)と密接なつながりを持っている。すなわちユダヤ人たちは、この男の病が癒されたという喜ばしい事実よりも、安息日にその癒しのわざ(厳密に言うと、「床を取り上げよ」という命令)がなされたということの問題視した。そして律法違反を教唆きようさしたとしてイエスを糾弾したのである。当時のユダヤ教では、安息日の禁止事項を39種234項目と、驚くほど細かく規定していた。床を取りあげる行為はその一つに抵触したのである。しかし「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」(マルコ2・27)。人が、律法をお与え下さった神の御心を離れて、ただ律法の字句を守っていても、全く無意味なのである。「わたしの父は今に至るまで働いておられる」(17)とあるように、罪に囚われた魂をその束縛から解放し、真の安息へと招く神の働きは、休むことなく続けられている。イエスはベテスダの池で男を癒したことによって、安息日に関する

律法を犯したのではない。それどころか正反對に、イエスは真の安息をその男にもたらすことによって、安息日の本当の意味、そこに込められた神の御心、すなわち救いへの情熱を世にお示しになったのである。

テキスト

1 ユダヤ人の祭 この祭りは仮庵かりいほの祭りのようだが定かでない。しかし何の祭りであつたかよりも重要なことは、その日が安息日であつたことである。

2 ベテスダ 池の名前については写本によってばらつきがある。前世紀にクムランで発見された銅の巻物に、ヘブル語でベテスダタイン(ベテスダの双数形)と書かれていることから、ヘブル語名はベテスダで、それがアラム語でベトザタとなるようである。伝統的に「憐れみの家」の意とされているが、「注ぎ出る場所」が、より正確な意味かもしれない。五つの廊 この池は双子の池であつたようである(前述の双数形もそれを示している)。今日、イスラエル博物館に展示されている復元模型を見ると、二つ並んだ池を「日」の字の形で取り囲むように、四方と中央に屋根付の廊が五つ設けられている。

3→4 「」の中の部分は後代の写字生が説明のため

挿入したものと考えられているが、男の返答(7)を理解する上で、大いに参考になる。癒しの社や池という概念は、アスクレーピオスに代表されるギリシャの偶像の影響ではないかと考えられている。もちろんユダヤの指導者たちは、池のそのような神秘的効用を認めていなかったであろうが、病で苦しむ人々にとっては、薬にもする思いで頼りたくなる言い伝えであつたらう。

5 三十八年のあいだ イスラエルが不信仰のゆえに荒野で余分に過ごした期間と同じである(申命2・14)。この38年という長さはこの池のいやしの効力が当てにならないことを強く示している。それに対して、イエスはただ一言をもって男をお癒しになったのである。なお、この男が長年にわたって四六時中その池の廊にいたということではなく、池の動くのが期待されるときを見計らって、定期的にそこへ連れてきてもらっていたと言うことであろう。

6 なおりたいのか 「何か願いがあるのか」(1・38)と二人の弟子に尋ねられたように、イエスは、この男にも信仰の一つの側面として、意志を確認しようと考えた。**7 主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれ**

る人がいません しかし彼の答えはすべてを他人のせいにする不平であつた。自分の意志の有無についての返答を避け、問題を機会の有無へとすり替え、言い訳に終始したのである。そこには、直前の記事(4・46-54)に登場したカペナウムの役人のような強い信仰は見られなかった。けれどもイエスはあわれみ深いお方である。そんな男を見捨てず、彼の中から信仰の応答を引き出して下さつたのである。

8 あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい 床とは藁でできたむしろのようなものであつたと考えられている。それは用が済めば、容易に丸めて担ぐことができた。

9 すると、この人はすぐにいやされ 彼を癒したのは、紛れもなくイエスの言葉であつた。その言葉に応答する意志をも、イエスは引き出してくださつたのである。**その日は安息日であつた** だが、ユダヤ人たちの関心事は、男が癒されたことではなく、その日が安息日だったことであつた。そして安息日論争へと発展していくのである。

参考図書 注解書 G. R. Beasley-Murray (Word), F. F. Bruce (Eerdmans), B. Lindars (New Century Bible), 他 The IVP Bible Background Commentary: NT. 他。

聖書

ヨハネ5・1〜9

タイトル
暗唱聖句どんな時も希望をもって！
起きて、あなたの床を取り上げ、そして
歩きなさい。
ヨハネ5・8

目 標

失意の中からも立ち上がらせてくださる
キリストを信じる。

導入

(松浦みち子)

皆さんはどんなことが得意で、好きですか。苦手なことはありますか。苦手で嫌なことは、ついついするのが嫌になりますね。そして、自分の苦手なことをひとのせいしたり、文句を言ったりしてしまいます。

愛知県東海市在住の一九九一年生まれの佐藤仙務^{ひさむ}さんは1才のときから病気で寝たきりです。愛知県立養護学校を二〇一〇年に卒業した後、大学院でも学び、現在28才の寝たきり社長としてわずかに動く左手の親指を使ってパソコンを打ち、口だけが動くので、大学の先生として学生に教えたり、作家としても活躍しています。佐藤仙務^{ひさむ}さんは、決して自分の病気を人のせいにはしたりせず、自分にできることを見つけて前向きに生きています。す

ばらしいですね。

今日は、佐藤さんよりもっとと長く寝たきりの生活が続いている人のお話です。

ベテスダの池

エルサレムにベテスダという名前の四角い池がありました。その周りには屋根のある廊下がついていて、たくさんの人が集まっていました。病氣の人、目の見えない人、足が不自由で歩けない人、食べることができなくてやせ細った人などが、力なくその周りに、座ったり寝たりして池をじーっと見ていました。なぜ、そんなに多くの人々がベテスダの池の周りにいたのでしょうか。それにはわけがありました。この池には不思議な言い伝えがあり、池の水が動いた時、真っ先に池に入った人の病氣はどんな病氣でも治るといわれていたのです。ですから、みんな、水が動くのを見逃さないようにとじーっと見つめて待っていたのです。

38年間も病氣の人

そこに何と38年間も病氣に悩んでいる人がいました。毎日、毎日、ベテスダの池で水が動くのを待っています。ところが、かわいそうに体が思うように動かないのです。

「あーあ、何とかならないのかなあ。もう一生病氣は治らないだろうなあ。あーあ、きょうもだめだった」。疲れきった顔で、ぼんやりと池を見ています。そして、あきらめ顔で池の側で横になっていました。そこにイエス様がいらっしやいました。そして、その男の人に近づいて声をかけられました。

「よくなりたいのか？」男の人はビックリしてこう答えました。「主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしがはいりかけると、ほかの人が先に降りて行くのです。」と。

この男の人は、38年もの長い間、病氣だったため、友人や親や兄弟もいなくなっていたのかもしれない。病氣がなおりたいのはもちろんですが、「よくなりたいのか？」という問いに素直に答えることができませんでした。もうすっかりあきらめていて、自分の病氣がなおらないのは、池の中に入れてくれる人がいないこと、自分はいらうとすると他の人が先に入ってしまうことなど、つい人のせいにして答えました。

しかし、その人の長い間の苦しみ、悩み、孤独な日々をイエス様は知っていて下さったのです。そして、どん

なに希望を失っているように見えても、その人の心のうちにあるかすかな望みに目を留めて声をかけてくださったのです。

イエス様は言われました、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。すると、命じられたことばに従った瞬間、その人のからだに力がみなぎり、ぐーっと手足に力が入り、さっさと歩きだしました。「治ったぞ！」その人の心は喜びにあふれました。どんなに嬉しかったことでしょうね。

希望は失望に終わらない！

わたしたちは、困難なできごとに出会った時、失望し、悩んで閉じこもってしまうことがあります。しかし、わたしに目を留め、声をかけ、癒^いして下さる方がおられます。そして、思いを越えてすばらしいことをしてくださる方がおられます。そのお方に心のうちを打ち明けて、願いを聞いていただきましょう。「神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい」(1ペテロ5・7)。

主にある希望は決して失望に終わることがありません。

♪神さまのみくには♪ (イン104、ホ75、ふ33)

聖書 ヨハネ7・37-39 テーマ 生ける水が川となつて

序論

(石田高保)

台風には莫大なエネルギーがありますが、ほんとうは自分で動く力を持っていません。ただまわりからエネルギーを供給され、気圧の影響で動かされているだけです。しかし聖霊の内には無限の供給があり、私たちはそれを継続して受けることができます。

一、供給の源泉

〈その腹から生ける水が川となつて流れ出るであらう〉、この「腹」という言葉は原語のギリシャ語において、身ごもるお母さんのお腹、「胎」を意味しています。皆さんのうちには何が宿っているでしょうか。どなたが宿っているでしょうか。イエス様を受け入れた人にはまちがひなく聖霊が宿っています。クリスチャンはその方により頼んで生きているのです。〈その腹から生ける水が川となつて流れ出る〉とは、皆さんの内側から聖霊による命が流れ出るということです。そういう感じがしなくてもだいじょうぶです。神の国は感覚や感情を土台とする世

界ではないからです。たとえば私たちの語る言葉が「塩で味つけられ」聖霊の知恵と命を持つようになります。身の周りの人たちを祝福し、神の命を与えて行くようになります。ヨハネ4章・サマリヤの女の個所では、渴いている人はイエス様によつて癒されるとあります。そうやって渴きを癒された人は、こんどはみずからの内に泉を持ち、他の人の渴きをいやす者となるのです。

あらゆる良いものは、それが愛であれ、知恵であれ、力であれ、正しさであれ、平安であれ、忍耐であれ、ことごとく神様から来きます(ヤコブ1・17)。内にいます聖霊から流れ出るのです。皆さんの内におられる聖霊の川は、チヨロチヨロとした小川のようなものではなく、揚子江やアマゾン川のような大河です。どのような川も、源流は小さな泉だったり、山林から染み出るしずくだったりします。しかし小さな流れもあちこちから集まる時、深く、広い川となります。聖霊の大河の源流、それはあなたのうちにおられる聖霊です。自分を生かし、人を生かす聖霊がおられることを感謝し、このかたが自由に働かれる者とさせていただきますでしょう。

二、供給の継続

皆さんは、立場はどうであろうと、今おかれている家庭や職場などにおいて神の国へ導く霊的なリーダーです。リーダーシップとは何でしょうか。カリスマ的な力や魅力や高圧的な態度で人を引っ張って行くことでしょうか。聖書的なイエス様のリーダーシップはそうではなく、周りの人々の成長に仕えるために影響力をもたらすことです。聖書的な価値観、ものの見方考え方を、実生活の中で適用しているのを見せたり、聞かせたりするのです。イエス様も律法学者の言うことは聞くべきだけでも、やっていることを真似してはいけなと言われました。人はあなたの言うことよりも、やっていることを知りたいたと願っています。お説教ではなく、本物に感動したいのです。世の中は、作り話とわかっている映画であれ、ドラマであれ、感動を求めています。それがノンフィクション、本当の話であつたら、感動は遥かに大きいはずですよ。十字架と復活の福音は人類史上最大、私たちの人生史上最大の感動を与えるノンフィクションです。生き方を根本的に変えるパワーがあります。わたし自身、十字架の力に圧倒されています。わたしたちの内の罪を、十字架のもとに持って行き、主の復活の命を注いでいただくと

き、そこに癒しと解放のみわがが起き、栄光から栄光へと主と同じ姿に変えられることができます。御霊の実が結ばれ、聖霊の賜物が開かれてくるのです。

〈誰でもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう〉、あなたはどの程度渴いでいるでしょうか。霊が眠ってしまっていないでしょうか。ぜひ主から魂に渴きを与えていただくように祈りましょう。そしてきよう示された罪があれば、それを十字架の血できよめていただき、主の復活の命で満たしていただきましょう。それこそが恵みを流してゆく秘訣です。そして聖霊の大河の中で自力で泳ぐのではなく、押し流されてゆきましょう。

結論

「あなたは地に臨んで、これに水をそそぎ、これを大いに豊かにされる。神の川は水で満ちている」(詩65・9)。聖霊の内には無限の供給があり、私たちはそれを受けることができます。神の川、聖霊の大河が天に流れているだけでなく、私たちの内から溢れ流れ出ることを信じましょう。

研究資料

(加藤 満)

ヨハネによる福音書7章は「仮庵の祭り」が舞台である。この前後にユダヤ人同士の問答(7・15)とイエスとの問答(7・40～52)が記されている。これらはイエス・キリストが誰であるか、またどこから来たかという問いである。仮庵の祭りがこの問いを答えるイエスの舞台として設定されているのは興味深い。仮庵の祭りはユダヤ人の先祖が出エジプトを経て、荒野の旅を仮住まいの小屋で過ごした事を想起させ、その間に神からの庇護(祝福)によって食べ物と守りを得たこと、神が会見の天幕の中に住まわれたことを感謝の内に記念した祭りである。また、出エジプトの贖い、収穫感謝、終末の救いの待望という意味も含められた、ユダヤ人にとって重要な祭りである。イエスはこのユダヤ人にとって出エジプトを覚える時、また終末の希望を仰ぐこの祭儀の場で、ご自身について、立って宣言されたのである。

テキスト

37 祭の終わりの大事な日 仮庵の祭りの第7日目である。祭の期間、祭司は朝ごとに神殿の丘を下ってシロ

アムの池で黄金の水差しで水を汲み、祭壇に注ぐ儀式があった。そして7日目には祭壇を七周してから水を注ぐ。その場には群衆が押し寄せ、神殿の音楽に併せ「あなたがたは喜びをもつて、救の井戸から水をくむ」(イザヤ12・3)が合唱され、終末の希望を人々はその注がれる水の中に見た。水を注ぐ事はイスラエルの民が荒野を旅している間に神が岩からはとばしる水をもつて民を養われたことをも記念している。関連して、水を注ぐ儀式は一種の雨乞いも含まれていたと推察される。そうであるなら、人々は神に対し祭儀の中で「水を下さい」と祈っていたのである。**イエスは立って、叫んで** 通常イエスは座って教えられるが(マタイ5・1)、群衆に呼びかけるために立ち上がり、真理を告知するために、御霊に満たされ、気迫を込めて大きな声で宣言をされた。**かわく者** 霊的な渇き。それは「わたしのところに来なさい」と招かれるように、イエスのみ満ちし得る渇きである。それは世のいかなるものに満ちていたとしても、感じる事を禁じ得ない渇きである。**わたしのところにきて飲むがよい** この招きは、「わたしのものにきなさい」(マタイ11・28)と同じ、神の救いをもたらし、啓示を告げる

者としての呼びかけの定型をなしている。また、ヨハネ福音書に見られる「わたしはくである」(6・35、8・12など)は全て「[ギ]エゴー・エイミー」という独特の表現が用いられ、イエスが出エジプト、出バビロンの神(出エジプト3・14、イザヤ43・10)の臨在であることを暗示してきた。この形式通りではないが、同じように人間の存在に必要不可欠な事物(ここでは水)になぞらえて語ることを通して、ご自身がイスラエルの神の臨在である事を啓示されている。

38 聖書に書いてある通り 特定の旧約聖書の個所が引用されているわけではない。しかし、その背景に考えられるのはイザヤ55・1、44・3である。またエゼキエルの預言である神殿から水が流れるという光景(エゼキエル47・1)。またはゼカリヤの預言の成就(ゼカリヤ13・1、14・8)である。**腹** 生命が生まれる領域で「胎」を意味する。またユダヤ人にとって腹は「感情・情緒の座」。言い換えればその人の「心から」である。**生ける水が川となつて** この水は命に至る水(ヨハネ4・14)であり、これを与え得るのは命そのものであるイエスご自身に他ならない。祭儀は生ける水の象徴である神とのふ

れ合いを反復することにより生命力の枯渇が潤される経験と言える。それにひきかえ、イエスの御業と臨在は、彼を信じ受け入れる者をこの世の全ての渇きから自由に、永遠の命にあずからせる。渇きを覚える都度に潤すのではなく、イエスの命に触れるものの内に、新しい命の泉をわき起こらせるのである。

39 栄光を受ける 福音書記者による説明である。イエスが栄光を受けるというのは、一粒の麦が地に落ちて死ぬこと(ヨハネ12・23～24)、即ち十字架の死を通して多くの実が結ばれることである。十字架に架かり、復活、昇天されたキリストこそが、生ける水、霊の賜物を与え、教会を生かし、教会の内に永遠に生きたもうお方であると告げているのである。

参考文献 R・V・G・タスカ著『ティンデル聖書注解 ヨハネの福音書』(いのちのことば社)。G・S・スローヤン著『現代聖書注解 ヨハネによる福音書』(日本基督教団出版)、『新聖書注解 新約1』(いのちのことば社)、『説教者のための聖書講解』(日本基督教団出版)、他。

聖書

ヨハネ7・37～39

タイトル
暗唱聖句生ける水が流れ出る
わたしを信じる者は、聖書に書いてある
とおり、その腹から生ける水が川となっ
て流れ出るであろう。ヨハネ7・38

目 標

キリストを信じ、聖霊の喜びにあふれる
者となる。

導入

(飯田勝彦)

秋と言えは？

収穫の秋、食欲の秋、読書の秋ですね。

秋は各地で祭りが多く行われる時期でもあります。みんなの地域でも祭りがあられるでしょう。

今朝の個所にも祭りのことが記されています。ユダヤの人たちが大切にしている祭りが三つあります。逾越の祭り、七週の祭り、そして10月頃に行われる仮庵の祭りです。37節の祭りは仮庵の祭りの出来事です。この祭りの詳しいことは旧約聖書レビ23・39～43を読んでみてください。祭りのときは、各地から大勢の人々が神殿のあるエルサレムに集まってきました。イエス様が何か叫んでおられますよ。イエス様の声に耳を傾けてみましょう。

う。

イエス様は、あなたを招かれる

祭りが最も盛り上がるのは祭りの最終日でした。盛り上がるとは、祭りに参加している人たちの気持ちが高ぶり、それぞれが大きな声を出して神殿に向かっていう状態だったでしょう。

この祭りのときは、シロアムの池の水を汲んで毎日、祭壇に注いでいたようです。それは、イスラエルが荒野を旅していた時、神様が岩から水を湧き出させられたことを覚えてのことでした。

祭りの終わり、群衆がひしめき合っている中で、イエス様が叫びました。興奮した群衆には、小さな声では聞こえません。イエス様は大声で叫ぶほど群衆に知って欲しいことがあったのです。それは、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」。

「わたしのところに来て飲め」とイエス様が人々を招かれています。私たちもイエス様の招きに応えていますか？

イエス様は、あなたを潤される

祭りに参加した多くの人は、気持ちが高ぶり、すべてが満たされたように感じたかも知れません。しかし、それは一時的なことだったでしょう。

デイズニールランドなど楽しい場所に行つて過ごしても、家に帰つて普通の生活に戻ると何か心が寂しくなったりしたことないですか？ 心の渇きは誰もがもつています。でも、イエス様を信じるなら心に生ける水を常に注いで頂けます。

この生ける水とは聖霊です。イエス様を信じる者には聖霊が与えられます。聖霊は今も私たちの心に神様の愛を注ぎ続けておられます（ローマ5・5）。みなさんも生活の中で辛くなることや悩むことがあるでしょう。そんなとき、心は疲れてカラカラになります。でも、イエス様が与えてくださった聖霊を通して、神様がどんなに私たちを愛し、守つておられるかに気づかせてもらえます。そしてイエス様は聖霊を通して、み言葉を与え心に力と潤いを与えてくださいます。

イエス様がくださる生ける水によつて毎日潤されましょう。

イエス様は、あなたを通して喜びを流される

イエス様は群衆に「わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となつて流れ出るであろう」と言われました。聖霊の生ける水を頂き心が潤されるだけでなく、「生ける水が川となつて私たちから流れ出る」と約束されました。

イエス様を信じるなら私たちは人を潤し、力を与える生ける水が流れ、周りの人を生かす者にされています。「僕はイエス様を信じているけど、そんなことできないよ。」と思うときもあるかもしれません。でも、イエス様は「あなたを通して生ける水が流れています。そして、その水が周りの人を生かします」と言われます。

ですから、まずあなたが生ける水である聖霊を受けとめ聖霊の喜びに与^{あずか}りましょう。その喜びは自然と周りに流れていきます。

まとめ

イエス様は、あなたをそして周りの人を潤し、力と喜びを与える者にしておられます。生ける水を毎日いただき、聖霊の喜びにあふれて歩みましょう。

♪わたしは主の子どもです♪（こ51、ホ88他）

聖書 ヨハネ9・1～11 テーマ シロアムの池での癒し

序論

(高橋頼男)

道を歩いて行かれる途中、ふと歩みを止められたイエスは、道端で物乞いをしていた一人の目の不自由な人をご覧になりました。弟子たちは彼についてイエスに質問しました。「先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」。イエスは、答えて「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」と言われました。

驚くべき答えです。空しい、堂々巡りの過去の因縁やこだわりを全く断ち切り、新しい将来を描かせ、希望をもって生きる力を得させる、素晴らしい力ある言葉です。

一、古くからの問い(1～2)

二〇一一年3月11日、未曾有の東日本大震災が起きました。その被害が詳しく報じられ、深刻な原発の問題も明らかになるにつれて、世界中がその惨禍に震撼し、大変な問題として受け止めました。多くの人々の思いが

突き動かされ、同情と奉仕のところが起こされました。同時に、「なぜ、こんな悲惨な災害が起こったのか」という素朴な疑問も生まれ、今まで、神のことなど関係なく生きていた人々が、にわかに「神」を問い出しました。「神さん、ひどいことしよる」。「天罰だ!」とは、そのような中で出てきた物議を醸す一つの解答です。

道端の目の不自由な人を見た弟子が「だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」と、古くからある問いをイエスに投げかけました。「因果応報」の考えは、古くから多くの国や民族の間にもあるようです。一つの結果には必ずその原因があるという解釈です。ときに、これは苦しみの中にある人を、さらに深い苦しみの闇に突き落とし、非常に冷酷で、突き放した人生観、世界観へと導きます。その背後には非人格的で気まぐれな神観(神についての考え方)があります。

二、問題にかかわられる神(3)

弟子たちは、通りかかりの道端で、たまたま物乞いをしていて目の不自由な人を見て、イエスに日頃の疑問を尋ねたのです。通りすがりに、目の不自由な人の面前で、彼の生活と全くかわりのない世界から、「生まれつき

の盲人」を題材に、信仰問答や神学論争を仕掛けたのです。何と心ない言動でしょうか。しかし、イエスのお応えは、弟子たちの発想や予想とは全く違っていました。

①まず、「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない」と言われ、人々の頭に浮かぶ応報論のたぐいを否定されました。

②イエスは、弟子たちが期待した疑問に直接応対する答えをなさいません。「神さまは、わたしたちが答えを知りたいと切に願う疑問に必ずしも答えを与えられるわけではありません」(『なぜ私だけが苦しむのか―現代のヨブ記』H. S. クシュナー)。

③さらに、「ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」と驚くべき言葉を語られたのです。

この言葉の中に、すでにこの目の不自由な人にかかわっていかうとされる神のみ心が明らかにされています。罪に満ちた人間世界を見捨てず、むしろ積極的なかわりを持つため、矛盾と意味不明、わけがわからなくなっている混沌こんとんの世界を引き受けるため、事実、神のみ子はおいでになったのです。そして、ついに理不尽極まる呪いの十字架に自らつけられ、「わが神、わが神、どうして

わたしをお見捨てになったのですか」(マルコ15・34)と叫びました。「どうして、なぜ」と問わずにおれないこの世界の悲惨、人生の矛盾や混沌に対して、これこそ、この事実こそ、神の答えではないでしょうか。

三、神のみわざが現れるため(3、6、7、25、38)

イエスは、この目の不自由な人の信仰を訓練し、導かれました。彼はお言葉に従い、シロアムの池に行って洗うと、見えるようになったのです。そして彼は、肉の目が開かれただけでなく、ついに霊の目も開かれました。迫害の中で主を力強く証しし、主を礼拝する者とされ、神の栄光のために生きる新しい人生が始まったのです。

私がお出会った目の不自由な信仰者10人のうちの10人が「私はヨハネ9・3のみ言葉で救われた」と感動をもって語られました。お一人お一人の内に秘められていた過去の煩悶はんもんを思います。しかしイエスのこの言葉が過去を断ち、未来に生きる勇気を与え、束縛から真の自由へと霊の目を開き、闇から光の世界へと導いたのです。

結論

神のご計画の最善を信じ、神のみわざが現れる生涯を生き抜きましょう。

研究資料

(中島啓二)

シロアムの池での目の不自由な人のいやしは、先に8・12でなされた「わたしは世の光である」という宣言の具体的な例証と言える。ベテスタの池での足の不自由な人のいやし(5章)と類似点も多いが、いやされる側に能動的な役割が与えられている点で対照的である。この人はイエスの命令に従い、その結果「神のみわざ」が現れた。さらに彼は、曲折を経て、自分に恵みを施して下さった方の本当のお姿を知ることになる。そして「主よ、信じます」(38)との信仰告白に至るのである。

テキスト

1 生れつきの盲人 当時、目の不自由な人は、施しに頼るほか生活の術がなく、人々が慈善に心を向けやすくなる神殿近くで物乞い^{ものこ}することが多かった(使徒3・2)。

2 この人が生れつき盲人なのは 目的・結果を示す接続詞[が]ヒナが用いられている。「誰かが罪を犯した↓それゆえ目が不自由である」という発想である。当時のユダヤ社会では、目が見えないなどの苦難は罪の結果であると考えられた。「誰かが…」を当然の前提と見なして、

弟子たちの議論は「誰が…」に飛躍する。だが罪を犯したためです。両親の罪、胎内にいる時の本人の罪などを想定している(ただし、本人の罪という日本人は前世の罪を連想するかもしれないが、ユダヤにその発想はない)。この応報(天罰)の発想は、ヨブの友人たちの考えからほとんど進歩していないものである。

3 ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである イエスも[が]ヒナを用いるが、弟子たちとは方向が正反対である。すなわち、「目が不自由である←神のみわざが現れる」という方向であり、これこそが神の発想である。ただし神が意図的にその人を目が不自由な者として誕生させられたと考えるのは早計である。測り知れない神の摂理があることを人は謙遜に受け止める必要がある。摂理の中で、一見(あるいは一時的には)不幸に思えることを通しても、神は超越的な力を発揮されて、結果的には、その人がイエスのみ顔に映る神の栄光を見ることができるようになって下さった。さらにそのみわざを通して、周囲の人たちにも、イエスこそがまことの世の光であることを認めるようにと、方向転換を促されたのである。

4 わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、
 昼の間にしなければならぬ。一義的には自身について
 語っている。「わたしが天から下ってきたのは…わたし
 をつかわされたかたのみこころを行うためである」(6・
 38)。「昼の間に」は自身が世にいる間ということだろう
 (5)。その上で「わたしたち」(弟子たちや教会)もイエ
 スの弟子であることを自覚し、そのわざを励むのである
 (14・12参照)。夜が来る。すると、だれも働けなくなる
 ユダがイエスから離れて「夜」に出て行ったことは象徴
 的である(13・30)。

5 わたしは、この世にいる間は、世の光である 8・
 12における宣言を踏まえての言葉。このいやしはまさに
 その宣言の具体的な例証と言える。

6 地につばきをし… つばきをいやしに用いる例はい
 くつかあるが(マルコ7・33、8・23)、土と混ぜてどろ
 を作るのはここだけである。

7 シロアム(つかわされた者、の意)の池 シロア(イ
 ザヤ8・6)、シラの池(ネヘミヤ3・15)も同じ場所と
 される。伝統的にヒゼキヤがギホンの水を引くために
 掘った地下水路(歴代下32・30)の終点とされてきたが、

2004年に南東100メートルほどの場所に新たな遺跡が
 発掘され、今日、そこが本来のシロアムの池と考えられ
 ている。その名は、ここではまさに神からつかわされた
 救い主であるイエスを指し示していると言えよう。そこ
 で彼は行って洗った。そして見えるようになって… 彼
 もまたイエスによって「つかわされ」、言われたとおりに
 従った。すると、神のみわざが現れ、彼は生まれて初め
 てその目で神の造られた世界を見るに至ったのである。
 8・10 おまえの目はどうしてあいたのか 長年そこで
 物乞いをしてきたその人を周囲の人はよく知っていた。
 それゆえ、彼の身に起こったことを不思議がり、またな
 ぜそうなったかを知りたがったのは当然であった。

11 イエスというかたが…見えるようになりました 彼
 は簡潔に事実を伝えた。ここでは「イエスというかた」
 という表現にとどまっているが、以後、彼の中でのイエ
 ス像は段階的に成長していく。すなわち「預言者」(17・
 次に「神からきた人」(33)と変化し、最後には「主よ、
 信じます」と、信仰と礼拝の対象になるのである(38)。

参考図書 10月6日分と同じ。

聖書

ヨハネ9・1～11

タイトル

心の目を開いてください！

暗唱聖句

わたしは、この世にいる間は、世の光で

ある。

ヨハネ9・5

目標

世の光キリストによる救いを頂き、キリストに従って生きる。

導入

(飯田勝彦)

友だちが「昨日、学校休んだけど大丈夫？」とか、「宿題一緒にやらない」などと声を掛けてくれたら、どんな気持ちになりますか？ 嬉しいでしょう。友だちが自分のことを気にかけてくれる時、本当に励まされますね。今朝の個所ではイエス様が目の見えない人に、関心をもつて気にかげられたことが記されています。

イエス様は、皆さん一人一人のことにも関心を寄せ、いつも見てくださっています。

神のみわざが現れた人

ある時、イエス様が道を歩いておられるとは目の見えない人を見られました。イエス様は彼を裁いたり、軽蔑の目で見たりしませんでした。イエス様は、弱っている

人たちにも関心を示し、優しく接してくださる方です。もし皆さんがこの彼のように、目が見えなかったならどんな気持ちでしょうか？

道を歩いている途中にイエス様は、おそらく足を止めてじつと盲人を見ておられたのでしょう。突然立ち止まったイエス様の視線の先を見た弟子たちは、イエス様に尋ねます。「この人が盲人になったのは、だれが罪を犯したからですか？」。イエス様は「本人や両親が罪を犯したからではありません。神のみわざが現れるためです」と答えられました。それから、つばきでどろを作って盲人の目に塗られました。盲人がイエス様が言われた通りにどろを池で洗うと、何と目が見えるようになったのです。まさに神のみわざがこの盲人に現わされました。

神のみわざを現されたイエス様

旧約聖書に「主は盲人の目を開かれる」(詩篇146・8)と記されてあります。ですから、盲人の目を開くことができるのは、人ではなく主なる神様だけでした。ですから、盲人の目を見えるようにされたイエス様は、まさに神様です。

それを思うと皆さんは、これまでイエス様の多くの奇

跡を聞いてきたでしょう。その奇跡を皆さんは心から信じていますか？ 奇跡を聞くたびに心の中で「ホンマかな。うそくさい」と思ったりしていませんか。イエス様は神様ですから何でもできるお方です。足の不自由な人をいやすたり、水の上を歩き、嵐さえしずめることができましたのです。

イエス様は、多くの人々を助けるために、世の光として来られ、神様のわざを現されました。

神のわざを体験できる私たち

イエス様が盲人の目を開き、神のわざを現されたのは、今から二千年も前のことです。そんな昔のことが今、現実におこるでしょうか。起こります！ 復活されたイエス様は今も生きて働いています。だから、今も私たちに神のわざを現してください。

イエス様を通して神のわざを体験する秘訣があります。それは皆さんがイエス様を心から信じ、イエス様の言葉に従うことです。

盲人の目がいやされるためにイエス様は、目にどろをぬられました。それだけではありません。イエス様は盲人に「シロアムの池に行って洗いなさい」と言われまし

た。もし、盲人がイエス様を信じず、イエス様の言葉に従って池に行かなかったなら、目はいやされなかったでしょう。盲人はイエス様の言葉を信じて池に行き、言われた通りに目を洗うといやされたのです。

今、イエス様は、皆さんの心の目を開きたいと願っておられます。心の目が閉ざされていると神様を信じることができません。皆さんの心の目は開かれていますか？ 心の目が開かれると、聖書が分かり、イエス様のこと神様のことがよくわかるようになります。そして、自分がどんなに神様から愛され支えられているかを体験できます。そのためには、心の目を開いてくださるイエス様を信じることです。心の目が開かれると盲人と同じように神のわざがあなたに現わされた証拠です。

まとめ

心の目が開かれると心に光が入るように、皆さんの表情や生き方を明るくします。世の光であるイエス様を信じましょう。

♪イエスさまにまさる♪ (ホ65)

聖書 ヨハネ10・1～15 テーマ 羊飼いなるキリスト

序論

(高橋頼男)

キリストは、「わたしはよい羊飼である」、また、「よい羊飼は、羊のために命を捨てる」と言われました。主イエスが、私の良い羊飼いであるということは、私にとつて、どういう意味をもつことなのでしょう。

一、弱く迷いやすい羊(イザヤ53・6)

羊は弱くて迷いやすく、また、迷っていることの自覚さえないこともあります。迷い出てしまった羊は、危険な状況にあります。オオカミやハイエナなど、羊を狙う猛獣がいますし、断崖や地表の割れ目、深い谷など、あらゆる危険が待ち受けています。

主イエスは、私たち人間がおるべきところから逸脱し迷い出た存在であることを、「失われた者の三つの姿」(ルカ15章)のたとえを通して教えられました。これらは神を離れた人間の悲惨な姿です。そして、私たちの内には、神の尊さを頂きつつも、孤独や空しさ、存在の意味を失ってしまっている「失われた者の自覚」があります。

さらに、イエスは「人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである」(ルカ19・10)と言われました。主は迷い出たものを、そのまま放っておかれません。迷い出て失われたものを何としても救い出すために、覚悟と決意をもって行動なさるお方です。私たちは、弱く、迷い出てしまった一匹の羊ではないでしょうか。

二、良い羊飼い(3・15)

主イエスは、「わたしはよい羊飼である」と言われました。良い羊飼いとどのような者でしょうか。

①羊のことをよく知っている(3、14)

何よりも、自分の羊のことに関するあらゆることを熟知している羊飼いこそ良い羊飼いです。彼は「自分の羊の名でよんで連れ出す」のです。その羊の一匹一匹の特徴と性質をよく知ったうえで、養い導いてくださいます。

②羊の門となる(7)

夜になると羊たちは囲いの中に入りますが、門には扉がありません。そのままでは危険ですから、その門のところに羊飼いが身を横たえて、自らが門となって番をします。夜中には、羊を狙って猛獣や盗人・強盗がやって来ます。しかし門となって横たわっている羊飼いを踏

み越えてでなければ、羊を襲うことはできません。良い羊飼いは、体を張って羊を守るのです。主イエスは「わたしは門である」と力強く言ってくださいます。

③羊のために命を捨てる（11、15）

良い羊飼いは、自分の羊を守るために、盗人や強盗、恐ろしい猛獣などと命を懸けて戦います。そのため、時には羊飼いが命を落とすこともあったのです。しかし、やとわれの羊飼いは、自分の命を懸けることまではしません。自分の羊ではないからです。主イエスは、私たちをご自分の羊として取り扱われます。十字架に命を投出して愛してくださいました。

三、安らかな出入り、豊かな養い（9～10）

羊のことをよく知り、心にかけて、命までも与えてくださる良い羊飼いに信頼してついでいくなら、「やすらかな出入り」、すなわち、私たちの人生の初めから終わりまで、安らかで安全、充足していることが約束されています。

また、主は「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」と言われました。良い羊飼いである主の豊かな養いにあずからせていただきますしやう。その恵みと祝福は、詩篇23篇に言い表されています。

「主は私の羊飼いですから、必要なものはみな与えてくださいます。主は私を牧草地に*いこ*わせ、ゆるやかな流れのほとりに連れて行かれます。傷ついたこの身を立ち直らせ、私が最高に主の栄光を現わす仕事ができるよう、手を貸してくださいます。たとい、死の暗い谷間を通ることがあっても、こわがったりしません。主がすぐそばにいて、道中ずつとお守りくださるからです。…まるで、あふれんばかりの祝福です。生きている限り、主の恵みといつくしみが、私についてきます。やがて、私は主の家に着き、いつまでもおそばで暮らすことでしょう」（リビンゲ・バイブル）。

主は「わたしはよい羊飼である」と言われます。私たちは「主は、私の牧者です！」と、心から応答し、その豊かな養いに与るものと*あずか*らせていただきますしやう。

結論

主イエスこそ私の良い羊飼いです。このお方は、弱く、迷いやすい私たちのことをよく知って、私たちを守り、導かれます。私のために、命さえ惜しまず与えてくださいました。私たちの羊飼いであるキリストを、新しく仰ぎ、このお方に信頼し、全てを委ね、お従いしましょう。

研究資料

(中島啓一)

前章で、イエスは生まれつき目が不自由であった人を見えるようにされたが、パリサイ人らはその人を会堂から追い出してしまった(9・35)。それは宗教共同体からの破門を意味する。そのことを踏まえて、イエスはこの羊飼いのたとえをパリサイ人たちに語ったのである。

このたとえの中で、よい羊飼いがイエスであることは言うまでもないが、盗人、強盗が当時の宗教指導者たちを指していることも明らかである。すなわち、神から、その所有である羊を託されていたはずの指導者たちは、目が不自由であったその人をも責任もって世話するべきであった。なのに、かえって彼を囲いの外に追い出してしまった。しかしその人はイエスというまことの羊飼いと出会い、その囲いに導き入れられるに至ったのである。

このたとえの背景にはエゼキエル34章がある。エゼキエルを通して神は、「あなたがたは脂肪を食べ、毛織物をまとい、肥えたものをほふるが、群れを養わない」(3)と、宗教指導者たちを糾弾した。羊を守るはずの彼らによって「わが羊は散らされ」(6)た。それゆえ神は、彼

らから職を取り上げ、散らされた羊を捜し集め、その群れのために「ひとりの牧者を立てる」と約束された。「わがしもべダビデ：彼は彼らを養い、彼らの牧者となる」(23)とある。今やその預言は成就した。すなわちダビデの子孫であるイエスこそが、神がその民のためにお立てになった、最良の羊飼いなのである。

テキストト

1 羊の囲い 夜間、羊は石の壁で作られた囲いに入れられた。その壁の上部には、侵入防止のいばらがあつた。盗人であり、強盗である ユダヤの語彙では、家などに押し入るのが盗人、屋外で通行人などを襲うのが強盗である。羊飼いはその両者から群れを守る必要があつた。

2 3 門 囲いの門は普通一カ所に設けられ、門番によって守られていた。羊は彼の声を聞く。そして彼は自分の羊の名をよんで連れ出す 複数の羊飼いによって一

つの囲いが共用されることは普通であつた。その場合でも羊飼いは門に立って羊の名を呼ぶだけでよかった。羊が飼い主の声を知っているからである。ここに羊飼いと羊の間の人格的なきずなを見出すことができる。神はご自身の所有の民を名前で呼ばれる(イザヤ43・1)。

5 ほかの人 宗教指導者たちを指す。彼らは見えないのに「見える」と言い張り、神から託された羊を間違った方向に導こうとした(9・41)。

6 彼らは：何のことだが、わからなかった 自分たちこそ神から群れを託された羊飼いだ、と自認していた彼らには、たとえの真意が分からなかった。

7 わたしは羊の門である 「羊飼のたとえ」の中に、短い「門のたとえ」(7、9)が挿入されている。後に語られる「わたしは道であり：」(14・6)と意味的に近いと言えるだろう。イエスこそ、救いへの道であり、また門なのである。

9・10 わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである よい羊飼いは、群れの羊が最低限の必要のみを与えられ、なんとか生きながらえているだけでは満足しない。主の望みは、神の民が永遠の生命を受け、その人生を最大限の豊かさで生きることなのである。

11 わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる 盗人(不誠実な指導者たち)は、群れのためにではなく、自分の利益のために行動する。しかしよい羊飼いきリストは群れの羊を盗人や獣から守り、彼ら

に命を与えるために、自分の命をお捨てになるのである。

12・13 羊が自分のものでもない雇人 雇人は、よい羊飼が持っているような羊に対する人格的な愛を持ち合わせておらず、危険が迫るときには自分を優先にする。この雇人がたとえの中で何を指すのかは定かではない。盗人などと並行して宗教指導者たちを指すと考えてもよさそうだが、雇人は盗人のように悪意に満ちてはいない。何を指すにしても、それがたとえの中心ポイントではなく、それとの対比によって、よい羊飼いの性質がさらに浮き彫りにされるということが重要であろう。

14・15 わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている 羊を知り、羊に知られているということ、よい羊飼の証しである。動詞(ギ)ギノースコー(知る)は現在形で、一時的でない永遠の知識を示している。父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じ 御父と御子とのお互いを知る特別な知識に基づく関係が、羊飼いと羊との関係にまで拡大されるのである。三位一体の永遠の交わりに招くという人間の創造の目的が、ここにも表されていると言えよう。

参考図書 10月6日分と同じ。

聖書

ヨハネ10・1～15

タイトル

イエス様は、よい羊飼いです

わたしはよい羊飼いです。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる。ヨハネ10・11

目 標

私たちのために命を捨ててくださった羊飼いきリストを信じる。

導入

(飯田勝彦)

聖書にはいろいろな動物が出てきます。皆さんが知っている動物はどんなものがありますか? 「牛、蛇、ろば、鳥、犬、馬、羊」。今日、登場するのは羊です。羊はイスラエルで生活になくはならない大切な家畜でした。

イエス様は、みんながよく知っている羊のこと話題にしてとても大切なことを話されました。イエス様の声に耳を傾けてみましょう。

わたしは、羊の門である

羊は強い動物ですか? それとも弱い動物ですか? 羊は、本当に弱い動物です。羊は臆病で、群れを作って生活しますので一匹では生きていけない動物です。当時

イスラエルでは、羊を夜の間、石で作られた囲いの中に入れていたようです。その囲いには門があり、羊が盗まれないように門番がいました。羊たちは朝になると、美味しい草を食べに門を通して囲いから出ていきます。そして夕方になると、門を通して安全な囲いの中に入ります。

イエス様は「わたしは羊の門である」と言われました。つまり「わたしはあなたの門です。あなたを守りますよ」と言って下さいます。

私たちは羊のように臆病で迷いやすく、独りでは生きていけない弱い者です。でも、イエス様が私たちの門となり、見守ってくださることは何と幸せなことでしょう。

わたしは、よい羊飼いです

皆さんは動物を飼っていますか?

動物を飼っているなら、あなたは飼主です。餌をあげたり散歩に行ったり、一緒に遊んだりするでしょう。でも、餌も与えず、大切に接していないなら、よい飼主ではありません。飼主は動物を大切にすることがあります。

羊飼いにとって羊はとても大切なものです。でも、自

分の羊を持たない雇い人は、羊が自分のものではないので、狼が来たりすると、羊を置いて逃げていくのです（11）。何て身勝手な雇い人でしょうか。でも、仕方がありません。この雇い人は自分のものではないので愛着がないのです。

よい羊飼いとはいエス様です。「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。」と詩篇23篇に記されてあります。牧者とは羊飼いのことです。よい羊飼であるイエス様は、皆さんの必要を知り、満たして下さる方です。今、皆さんで困っていること、悩んでいること、不安に思っていることがありますか？

「イエス様、あなたはわたしのよい羊飼いです。何を信じます。今、僕は〇〇な悩みがあります。どうぞ解決して下さい」と、よい羊飼であるイエス様に話して下さい。イエス様は皆さんの必要を満たして心に平安を与えて下さいます。

わたしは、羊のために命を捨てる

イエス様は、「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。わたしはよい羊飼である。よ

い羊飼は、羊のために命を捨てる。」（10、11）と言われました。イエス様が私たちに一番願っておられることは、私たちが豊かな命をもつことです。それは、いろんな悩みや困難がある生活の中でも、喜びと平安をもって生きる命です。また、死んでも生きる永遠の命です。よい羊飼であるイエス様は、素晴らしい命を私たちに与えるために地上にきてくださいました。そして、滅びに向かっていた私たちに豊かな命を得させるために、ご自分が私たちの罪の身代わりとなって十字架で命を捨てて下さいました。しかしイエス様は三日目に復活され、イエス様を信じる者の中に入って下さったのです。ですから、イエス様を信じる者の内には豊かな命が与えられています。

まとめ

皆さんにとってイエス様は、よい羊飼いですか？ イエス様はあなたのよい羊飼になりたいと願っておられます。イエス様を信じて、よい羊飼であるイエス様とずっと一緒に過ごしませんか？

♪イエスさまについていこう♪（ホ117、イン82）

聖書 ヨハネ11・32～44 テーマ ラザロのよみがえり

序論

(高橋頼男)

主イエスは、死んで葬られ、その遺体がすでに四日間も墓の中に置かれているラザロについて、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」と、驚くべきことを宣言されました。姉のマルタは、終わりの日のよみがえりの時のことを言われたのだと受け止めたましたが、そうではありませんでした。イエスは、ラザロの墓の前に立ち、「もし信じるなら神の栄光を見らるであろうと、あなたに言ったではないか」と言われ、その場でラザロを墓の中からよみがえらせました。

一、死という現実(17～29)

愛する者の死、そして、死の事実を現実のものとして徹底させる葬り、さらに、墓に葬られて四日経過しているという状況、これらのことは最早ラザロに關して、何の望みもなく、希望は完全に失せたということです。祈って主に期待していたマルタとマリヤでした。「あなたが愛しておられる者が病気をしています」との短い知

らせで十分であると信じていましたが、主は来てくださらなかったのです。遅れて来られた主の前で、マルタもマリヤも思わず「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう」と言いました。しかしマルタは、自分が今も主に対する信仰を失ったのではないことを言いました。これに対して主は「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たといい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない」と言われたのです。マルタは、やがて終わりの時によみがえれることを信じていますと告白しました。しかし彼女は、「主が、今、ここで、この状況の中で、わたしに働きかけてくださる」という生きた信仰をもつことができませんでした。まったく信じていないわけではありません。確かに、今も主を信じているのです。しかし主のお言葉と現実の差があまりにも大きく、今、ここでお言葉のとおりには信じることができないのです。そして、ラザロのよみがえりを将来のこと、教理上のこととして受け止めようとしたのです。

わたしたちの信仰の問題は、しばしばこの不信仰にあります。厳しい現実の状況を超えて語りかける神のお言

葉をなかなか信じることができません。また、しばしば私たちの心には失望があります。信じたけれども、信じたようにはならなかった、願うように、思うようにならなかったという、かつての苦い経験、失望感があるのです。これらは、主のお言葉をしっかり受け止めることをさまたげてしまいます。

二、死からのよみがえり (30〜44)

主の遅れは、主のご計画であり、この遅れが主の栄光を圧倒的に現す機会となるのです。死んで四日経った死人のよみがえりは、全く考えられないことでした。「ユダヤ人の間には、死者の魂は三日間、死体の近くにあって体に戻ろうとするが、四日目に肉体が腐敗していくのを見て、最終的にはその場を離れるという考えがあったといわれる。ラザロの復活を、だれもが真の奇跡と認めるようにイエスは四日目まで延ばしたのかもしれない」(イエスの生涯・内田和彦)。

わたしたちの周囲の現実や状況、思いや願いをはるかに超えたところで、神様の御業がご計画されていることを信じたいと思います。とりわけ、私たちの祈りが聞かれないと思われるとき、願うように思うようにいかない

とき、違う結果が現れたとき、神様は私たちの思いを超えてご自身の御業を進めておられるのです。そして、それは神様ご自身の栄光をいかなく現すこととなるのです。(もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか)。

三、聞かれざる祈り

内村鑑三には、麗しい信仰者であった娘のルツ子がいましました。彼は娘を深く愛していました。ある時、彼女が病気になるります。父、鑑三は切に愛娘の癒しを神に祈りました。そして、「この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり」(文語訳)とのみ言葉に、娘の癒しと回復を確信しました。しかし、そのような熱い祈りも固い信仰も空しく、ルツ子は死んでしまいます。彼の信仰は根底から試みられました。しかし、ついに墓地に遺体を納める時、彼は「ルツ子さん、ばんざい！」と天に大声で叫んだのです。この経験を通して、彼は長年の疑問であった復活信仰を獲得し、イエスの死と復活を大胆に語り出したのです。

結論

信仰によって神の栄光を見る者となりましょう。

研究資料

(中島啓二)

「墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、…よみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう」(5・28～29)。ラザロのよみがえりは、この終わりの日に起こる出来事の^{まえあじ}前味、あるいは生きた「たとえ」と理解して良いだろう。神は終わりの日に、墓の中にいる者たちをよみがえらせるだけでなく、今、「神の子の声」を聞く者にも、よみがえりの命をお与えになるのである。

なお、カリキュラムは11・32～44となっているが、参考のため17節からの解説を記す。

テキスト

17 イエスが行ってごらんになると、ラザロはすでに四日間も墓の中に置かれていた イエスは「ラザロが病氣であることを聞いてから、なおふつか」(6)の間、ご自身の「時」(2・4、7・6)を待っておられた。当時一般には、死者の魂は死後3日を過ぎてから、永遠に墓を去ると考えられていた。この4日という日数は、ラザロの死が動かしやうのない事実であることを示す。

19 大ぜいのユダヤ人が…慰めようとしてきていた ユ

ダヤでは、埋葬から一週間にわたって、遺族が悲しみの日々を過ごし、人々の弔問を受ける。この慣習は〔ヘシバー(七の意)と呼ばれ、今日も行われているそうである。21～22 もしあなたがここにいて下さったなら 必ずしも不平ではなく、イエスに対する信仰も含まれている。23～24 あなたの兄弟はよみがえるであろう イエスはこれからすぐに起こる肉体のよみがえりについて語った。しかしマルタは、終わりの日のこととしか受け止められなかった。当時のユダヤ教では、終わりの日のからだのよみがえりが一般に信じられていた(パリサイ人はそのことを信じ、信じないサドカイ人と対立していた)。25～26 わたしはよみがえりであり、命である 死者をよみがえらせ、命を与えるお方は、ご自身がよみがえりと命そのものであられる。それはイエスが「永遠の命に至る朽ちない食物」(6・27)を与えると**言われた後に**、「わたしは命のパンである」(6・35)と宣言されたのと似ている。たとい死んでも生きる 信じる者がイエスと結び合わされているなら、肉体の死を経験しても、イエスのよみがえりにあずかることが出来る。いつまでも死なない 「わたしの言葉を守るならば、その人はいつま

でも死を見ることがない」(8・51)。命そのものである方につながった命は、いつまでも続くのである。

27 あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております マルタは、イエスの言葉を理解できたわけではなかったが、イエスの言葉を受け入れ、真心からの信仰を告白した。

33 激しく感動し [ギ]エンブリマオマイ(直訳「憤って鼻を鳴らす」)。この憤りは、人々を絶望に追いやる死に、そして不信仰によって死に翻弄^{ほんろう}されている人々に向けられたものだろう。

35 イエスは涙を流された ワツと泣き出すような泣き方。ラザロがよみがえるのを知っておられたにもかかわらず涙を流されたことは、イエスが全き神であると共に、全き人であったことを示している。それゆえ「わたしたちの弱さを思いやる」ことおできになるのである(ヘブル4・15)。

39 もう臭くなっております…すでに腐敗は進行していた。現実を前に実際のマルタは不信仰に陥る。

40 もし信じるなら… イエスはマルタに、彼女が告白した信仰に立ち返るための道標を与えた。

41〜42 あなたがわたしをつかわされたことを、信じさせるため 人々が知るべきことは、神とイエスの一体性であった(17・21参照)。

43 ラザロよ、出てきなさい この呼びかけは、終わりの日の呼びかけを指し示すものである。ラザロが与えられたものは、よみがえりの命を指し示すとは言うものの、まだ朽ちる命の刷新に過ぎない。けれども終わりの日には、主は人々をよみがえりの命へと招いて下さるのである。その命を人々に与えるために、ご自身がまず十字架で死に、「眠っている者の初穂として」(1コリント15・20)、よみがえらねばならなかったのである。

44 死人は手足を布でまかれ…たまたま、出てきた ユダヤの埋葬では、骨がばらばらにならないように、たとえ生きている人でも立ち上がれないほど、きつく布が巻きつけられた。ラザロがその布を巻かれたまま立ち、歩いたことは、出来事の奇跡的な性質を際立たせている。イエスの場合(20・5〜7)と異なり、ラザロは体も顔も布で包まれたままであった。視界も覆われていた彼は、ただ彼を呼ぶ「神の子の声」を頼りに出てきたのである。

参考図書 10月6日分と同じ。

聖書

ヨハネ11・32～44

タイトル

ラザロのよみがえり

暗唱聖句

もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか。

ヨハネ11・40

目標

神の全能を覚え、信仰をもって祈る者となる。

導入

(和田牧子)

皆さんのおうちにペットはいますか？ 先生のおうちにはネコのシロがいます。もうおばあちゃんのネコです。こわいときにあわてて逃げたり、机に登ろうとするとき、ヨロヨロしているときがあります。いつか死んでしまったらとても悲しいです。皆さんはそんな気持ちになったことはありませんか？ イエス様も大切な人が亡くなったとき、とても悲しまれましたよ。

イエス・キリストのご計画

ベタニヤに住むマルタとマリヤと弟のラザロはとつても仲良しの姉と弟でした。そしてイエス様は、この三人を大切なお友だちと思っていました。

この弟ラザロが病気で死んでしまったのです。イエス様はなぜか、ラザロの病気を聞いてから、すぐにはお見舞いに行きませんでした。やっとイエス様がお墓にいられた時には、ラザロがお墓に入れられてから4日も経っていたのです。それでマルタは言いました。

「イエス様、もしあなたがここにいてくださったら、ラザロは死ななかつたでしょうに……」。なぜもつと早く来てくれなかつたの？ とマルタは思っていました。イエス様は沢山の人たちの病気をいやされた方です。もしイエス様がラザロの病気のためにお祈りくださったら、弟ラザロは死ななかつたかもしれません。

ところがイエス様はこう答えられました。「あなたの兄弟はよみがえります！」よみがえるとは生きかえるという意味です。いったいどうやって？ イエス様は続いて言われました。「わたしはよみがえります。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです」。死んでも生きるとういう意味でしょう。不思議な言葉ですね。

「また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠にいつまでも死ぬことはありません。あなたはこのことを信じますか？」マルタは答えました。「はい、主よ。わたしは信じています」。

しはあなたがただ一人の救い主、神の御子であると信じております」。マルタはイエス様を信じるなら永遠のいのちをいただけること、天国に行けること、イエス様こそ神様の御子救い主であることを信じていたのですね。

イエス様はなぜ遅れてやってこられたのでしょうか。実はこのことにもイエス様のご計画があったのですね。もっと不思議なわざが起こることをみんなに知ってもらうために。神様にできないことは何もないことを知ってもらうために。そして神様がイエス・キリストをこの世につかわされたことをみんなが信じるためにです。

鍵は『信仰』です！

イエス様がお墓にやってくると、マリヤや彼女を慰めていた人たちも集まってきました。みんな悲しみでいっぱいになりオンオンと泣いていました。それを見たイエス様も心を痛められました。そしてイエス様までが涙を流されたのです。イエス様はラザロをとつても愛しておられたのです。イエス様は言われました。「墓の石をとりのけなさい」。マルタは言いました。「イエス様、もう臭くなっています。4日にもなりますから…」。

イエス様は彼女に言われました。「もし信じるなら神

の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」。マルタも人々も、神様の栄光、イエス様のすばらしさをまだまだ知らなかったのです。イエス様の言われたとおりに、お墓の大きな石を取りのけると、イエス様は目をあげて神様にお祈りをされました。「父よわたしの願いを聞いてくださったことを感謝します」。そして大きな声で叫ばれたのです。「ラザロよ出てきなさい！」。するとどうでしょう！ 死んでいたはずのラザロが、手と足を長い布でグルグル巻かれたまま、お墓から出てきたのです。彼の顔も布で包まれていました。みんなびっくりです。「ほどういてやって、帰らせなさい」とイエス様は言われました。イエス様は死んだ人を生き返らせるほどの力をお持ちの方なのです。

結び

みなさんは一生懸命に祈ったのにその通りにならなかったという経験があるかもしれません。しかし信じましょう。もっと大きな、一番良い神様のご計画が用意されているはずですよ。そしてさらに信じましょう。神様にはおできにならないことは、何一つありませんよ！

♪主がついてれば♪（イン10、PW12）

聖書 黙示録1・9～20 テーマ パトモス島での幻

序論

(石田高保)

黙示録は終末に起こるべきことが記されている預言書です。まず神様が預言の内容をキリストに伝え、キリストは十二使徒のヨハネに告げ、彼がそれを書き記しました。その書かれた目的は自分と同じ迫害の中にある教会を再臨の希望で励ますためであり、未信者には大患難時代の迫ることを知らせて神に立ち返らせるためです。

一、キリストの栄光の姿

ヨハネは迫害によってエーゲ海の小島パトモス島に流刑となっていました。ある主の日つまり日曜日に彼は御霊に感じて大きな声を聞きました。見ているものを七つの教会に書き送るようにとのことでした。まずそこには七つの金の燭台が見えました。その奥義は七つの教会を表しています(20)。その燭台の間に人の子のような者つまりイエス様が見えました。このことはイエス様が小アジア(現在のトルコ)の七つの教会を行き巡^{めぐ}っておられることを表しているようです。これは全世界の教会を主が

行き巡^{めぐ}っておられることに通じ、これによって教会のかしらはキリストであることを確認させられます。そのお姿は13～16節に記されている通りです。〈足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめ〉、これはイエス様が高い位の威厳をまとうておられることを表しているようです。〈そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり〉、これは知恵と年を経たことによる威厳を表していると思われます。〈目は燃える炎のようであった〉、墮落や罪に対して決然とした意志を示しているようです。〈その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり〉とは、背く人々をその足の下に踏みつける力を表していると思われます。〈声は大水のとどろきのようであった〉とはその言葉に神の権威があることを表しているようです。〈その右手に七つの星を持ち〉とは七つの教会の御使、この場合は教会の代表者のことを表していると思われます。〈口からは、鋭いもろ刃のつるぎが突き出ており〉、神に敵対する者はこのつるぎによって滅ぼされることを表しているようです。〈顔は、強く照り輝く太陽のようであった〉とは、近づき難い^{がた}神の栄光を表していると思われます。このようにイエス様の栄光のお姿

は、福音書のそれとかなり違いますが、それはキリストなる神の本質が遺憾なく現れていると言えるでしょう。

二、キリストの権威

ヨハネがイエス様を見た時、あまりの恐れ多さに倒れて死人のようになりました。これはかつてペテロがイエス様の勧めに従って大漁を得た時に感じたものに通じます。あるいはイザヤが神殿で神の栄光を見たときにも同じ感覚がありました。人間が直接神の栄光を見ると自分の罪深さがあらわとなって立つことができないようです。しかし栄光のイエス様は恐れているヨハネの上にご自身の右の手を置いて「恐れるな」と言ってくださいました。何と慈愛にあふれたことでしょうか。聖書には恐れている者には恐れなくてよいというメッセージが随所にあります。これは悩み多いこの世を生きる私たちにあって大きな慰めではないでしょうか。

それからイエス様はご自分について語られます。「わたしは初めであり、終りであり」、永遠の初めから永遠の終りに至るまで時間を超越して存在するということです。天地創造の前からすでに存在し、新天地の永遠の世界に存在する方です。続いて語られたことは、(生きて

いる者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である)、イエス様は十字架にかかって死なれましたが、三日目に復活して今も生きておられます。イエス様の復活は十字架による罪の贖いが完全なものであることを証明し、死を打ち破って信じる者を死から救うことを確実にされました。また私たちと永遠に共にいてくださるようになりました。(死と黄泉とのかぎを持つている)、黄泉とはキリストを拒んだまま死んだ人の行くところです。イエス様は生きているあいだ神様に対してどのような態度をとったかによって人をさばれます。イエス様の十字架の贖いと復活を受け入れた人は天国に入られます。しかし神様に対して無関心、あるいは敵対していた人は死ぬと黄泉に送られ、最後の審判を待つこととなります。イエス様は人間を究極的にさばく権威をお持ちであることを心にとめましょう。

結論

イエス様は現在生きていて教会を治めておられ、私たちひとりびとりに目を注いでおられます。これから起ころうとするどのような困難にもイエス様は最終的な勝利者として臨んでくださることに望みを置きましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈と思想

黙示録については近年、同時代のユダヤ教文献の研究によって、従来解釈が難しかった個所の多くが解明されており、それを踏まえた注解書や研究書が刊行されている。日本語で読める本としては岡山英雄『小羊の王国』と同『ヨハネ黙示録注解』、ボウカム『ヨハネ黙示録の神学』が特に優れている。最初にこれらの書の総論を読んでも、黙示録全体のメッセージを把握しておかれることをお勧めする。

黙示録の執筆目的は、迫害の中にある信仰者がこの世と妥協せずに戦い抜くよう励ますことであり、そのために神とキリストの究極的な主権が宣言され、勝利者への栄誉と来るべき新天新地のすばらしさが描き出されている。本日の箇所はその導入部分である。

テキスト

9 わたしヨハネは 原文ではこの部分が最初に来る。自分の名前だけを記す簡潔な自己紹介は、著者が良く知られた人物であったことを示す。初代教会以来一貫して

著者は十二使徒の一人ゼベダイの子ヨハネと信じられており、それを疑う理由は存在しない(エウセビオス「教会史」)。あなたがたの兄弟であり「兄弟」との表現はヨハネの謙遜と、読者との親しい関係を示している。共にイエスの苦難と御国と忍耐とにあずかっている 著者も読者も共に、迫害の渦中にいた。ローマ皇帝ドミティアヌスによる国家的迫害(95〜96年頃)であった。ヨハネが主イエスより若かったとしても、すでに80歳を越えていたはずである。迫害に遭うことは「苦難と忍耐」だけでなく、主イエスの「御国」(主権)にあずかる栄誉をも意味していた。神の言とイエスのあかしとのゆえにこの組み合わせは2節と同じである。ヨハネが捕えられて流刑とされたのは、彼が特に宣教の務めについていたからであるが、流刑地でも彼は大胆に宣教者・預言者としての務めを果たすのである。パトモスという島にパトモスはエーゲ海にある小島で、鉦山の島であった。老ヨハネは受刑者として、そこで鉦山労働をさせられていた(Auneが古代教会の証言を引用している)。

10 主の日に 日曜日を「主の日」と呼ぶのは、新約聖書でここだけである。御霊に感じた 直訳すると「御霊

の中にいた」(ギ)エゲノメーン・エン・ブネウマティ)。黙示録(ここと4・2)にしか出てこない特殊な表現である。新改訳2017は「御霊に捕らえられ」聖書協会共同訳は「霊に満たされ」と訳す。ラッパのような大きな声 も含め、エゼキエルへの啓示の出来事とモチーフが共通している(エゼキエル2・2他)。

11 あなたが見ていることを書きものにして：送りなさい 視覚的に表現された幻(ビジョン)を言葉で伝えることが、「黙示」の本質である。言葉(理性・論理)で把握しきれないものを伝える手段だが、本来人間の視覚をも超えた超越的次元の真理が開示されたものとして、慎重に解釈する必要がある。エペソ、…にある七つの教会に送りなさい 七つの教会については、使徒時代から終末までの歴史を七つに区分し、終末直前の教会をラオデキヤ教会に当てはめる解釈がある(デイスペンセーション主義)。魅力的な解釈であり、19世紀から20世紀前半にかけて主に英語圏の福音派教会で支持されていたが、現在は少数派となっている。「その日、その時は、だれも知らない」(マタイ24・36)と言われた主イエスの権威を超えて、終末の時を知っていると主張する致命的な誤り

を犯すことになるからである。これらの教会は第一義的には1世紀末に実在した小アジアの教会の実情を表したものと素直に解釈すべきであるが、「七」という完全数を選ぶことによって、全世界のすべての時代の教会を七つの類型に分けて表現したものと解釈することも可能であり、有意義である(ボウカム他)。1章で繰り返し「七」が用いられることは、本書全体を通じて数字が象徴的意味を持つことを示している。七つの金の燭台 20節で「七つの教会」の象徴と説明されている。その中には主イエスから厳しく叱責されている教会もあるが、そのような教会も主の目には福音の光を輝かせる燭台であり続ける。

13 16 人の子のような者 ここで示される視覚的表現をそのまま描いては、グロテスクな存在になってしまう。それぞれの象徴が示す意味(主イエスの聖、きよさ、権威、など)に注目すべきである。

17 18 初めであり、終りであり、また、生きている者： 啓示をもたらした方が、主イエスご自身であることが強調して示されている。

参考図書 11月17日の研究資料を参照。

聖書

黙示録1・9、20

タイトル

パトモス島での幻

わたしは初めてであり、終りであり、また、

生きている者である。黙示録1・17、18

目 標

困難の中でも世界の歴史を支配しておられるキリストを信じて生きる。

導入

(和田牧子)

わたしたち人間はどこから生まれたのでしょうか。この世界の歴史をずっとずっとさかのぼっていくと、どこから始まったのでしょうか。そして、この世界はどこへと行きつくのでしょうか。そんなことを考えていると頭が痛くなってしまうですね。うーん、むずかしいな。そんなわたしたちに神様は、ある幻を見せてくださいました。

ヨハネの見た幻

イエス様の弟子の一人であったヨハネは、イエス様のことを伝えたり、教会をたてあげるお仕事をしていました。ところが、それに反対する人たちがヨハネをつかまえて、とうとうパトモス島に流されてしまいました。

その島である日、ヨハネは神様を礼拝していました。

すると突然、後ろのほうからラッパの音のような大きな声が聞こえたのです。「あなたが見ていることを、書きとめなさい。そして7つの教会に送きなさい」。

いったいだれだろう？ ヨハネがふりむくと7つのロウソクの台が見えました。金色に光っています。それらの台の間に、長い上着を着て、胸に金色の帯をしめたイエス様のようなお姿がありました。頭は雪のような、羊の毛のような、まっ白な色をしていました。目は燃える火のようでした。足はみがきあげられたしんちゅうのようでした。声は大波がおしあげられるようでした。その右の手には7つの星を持ち、口には両刃もちばのつるぎをくわえていました。顔は強く照りかがやく太陽のようでした。

うーん、すごいですね！ まぶしくてまぶしくて、まっすぐに見つめるのが難しいような、光り輝いているイメージでしょうか？ 力強いイメージにも思えますね。みなさんはどう思いますか。

永遠におられるイエス様

ヨハネはその幻を見たとき、足もとに倒れて死人のようになってしまうました。大変です！ するとその人は

右手をヨハネに置いて言われました。「恐れてはいけません。わたしは初めてであり、終わりであり、また、生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である」。優しくヨハネに「恐れることはありませんよ」とお声をかけてくださったのですね。そして「わたしは初めての初めからおる者であり、永遠にずっとおる者だ」とおっしゃったのです。つまりわたしたちが存在する前からおられた方で、この全宇宙を造られ、わたしたち人間も造られ、その人間の歩みをずっと見守ってこられた方だということです。その方こそ、イエス・キリスト様です。

イエス様は言われました。「わたしは死とよみとの鍵をもっています!」「死とよみとの鍵」とは何でしょうか? やがてこの世界の終わりがやってきたとき、イエス様は、イエス様を信じる人を迎えるためにおいでくださると約束されています。しかし罪をもったままの、イエス様を神様として信じ受け入れなかった人たちの行くところは、永遠の死であると語られているのです。悲しく、こわいことです。

イエス様のおられる天のみくに行けるのか、それと

も永遠の死に向かっているのか、どちらに進むかを分ける鍵はイエス様がつけておられます。

イエス様を信じて生きよう

わたしたちは毎日おうちで遊んだり、幼稚園や学校に行ったりしています。そんな毎日をイエス様と無関係に生きていると、不安でいっぱいになることがあるかもしれません。だって、わたしたちは今日一日のいのちでさえも自分で守れないかもしれないのです。そう思いませんか。こわいことですが、いつ地震がくるかもわからないし、いくら安全に氣をつけていても、交通事故にあっってしまうかもしれません。それほどこの世界は不安がいっぱい、人間は小さな弱い生き物かもしれません。

でもそんなわたしたちをイエス様は「大切な私の子よ」と愛してくださっています。初めから終わりまでずっと一緒にいてくださるのです。たとえ死んでもイエス様によって天国に迎えていただけることを思えば、希望がわいてきませんか? イエス様は力強く語りくださっていますよ。「わたしは初めてであり、終りであり、また、生きている者である!」

♪神さまのみくには♪ (イン104、ホ75、ふ33)

聖書 黙示録21・22・22・5 テーマ 神の国の完成

序論

(金井信生)

イエスを主と信じ、救われた者が目指すのは、神の国の完成、すなわち神と共に住む聖なる都です。黙示録の最後に記される都を学び、今主と共に歩む信仰の生涯が、そのまま結びついていることをおぼえます。

一、聖所である都

〈この都の中には聖所を見なかった〉のは、〈神と小羊とが、その聖所なのである〉からです。もはや人が神を探し求めたり、犠牲を携えて近づく必要がなく、神と人が一つ所にいるからです。もともと、人は神と共に住み、交わりを持つ存在として造られました。しかしエデンの園から追放されて以来、神を探し求めてきました。神はイスラエルの民にご自身を啓示され、神の民にとって「あなたの祭壇のかたわらにわがすまいを得させてください。あなたの家に住み、常にあなたをほめたたえる人はさいわいです」(詩84・3〜4)と、神に近く住むことが最高の願いでした。

ここに、主イエスを救い主と信じ、〈小羊のいのちの書に名をしるされている者〉に永遠の住まいが約束されています。この都は神の栄光が満ちているので、太陽や月の光も必要がありません。また夜がないので、門が閉ざされることはありません。ただし、キリストによる罪の赦しを受けず、罪を犯し続ける者はひとりも入ることができません。

永遠の都は世の終わりに実現する者ですが、すでにキリストの救いを受けている者にとっては、ある日突然移されるものではありません。「わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、『わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう』」(Ⅱコリント6・16)と告げられているように、救われてからやがて永遠の都に入る時まで、神が共にいてくださり、世の光であるキリストが常に導いてくださっています。

二、いのちの水の川・いのちの木

聖なる都には〈いのちの水の川〉が流れ、〈川の両側にはいのちの木が〉生えています。いのちの水の川といのちの木も、エデンの園にあったものです。ただ、アダムとエバが神の言葉に従わなかったために、失われていた

ものです。

いのちの水は〈神と小羊との御座から出て〉おり、人を生かす命にあふれています。またいのちの木の豊かな実は人の心に彩りや味わいを与えます。またその葉はいやす力があり、病も死も永遠の都には入り込むことはありません。この恵みも、キリストを信じ従う者には、この世においてすでに与えられています。詩篇1篇には、主の言葉を喜び従う者が「流れのほとりに植えられた木」のように栄えることが歌われています。

またイエスは「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」（ヨハネ4・14）と約束されました。

三、礼拝の民

聖なる都に迎えられたのは礼拝の民です。これまで神の臨在に触れた者はあっても、〈御顔を仰ぎ見る〉ことの許された者はいませんでした。しかし、ここでは主を「顔」と顔とを合わせて（1コリント13・12）礼拝するのです。この礼拝者たち、すなわちキリストの救いを受けている者たちは、天にあるいのちの書に名が記されているだけ

でなく、その人自身に御名が記されています。ですからクリスチャンには、「この名によつて神をあがめなさい」（1ペテロ4・16）と命じられているのです。

黙示録ではこれまで地上に起こる終末の混乱や悲惨と、天上の礼拝の姿とをそれぞれに見てきました。しかし、最後はすべての罪と悪は滅ぼされて、永遠の聖なる都と礼拝の民だけが残ります。

私たちはなおこの地上で、試練や誘惑の多い中を歩んでいきますが、礼拝に集うことが大きな恵みとして与えられています。地上での礼拝は不完全なところもありますが、天上の礼拝者と心を合わせて生ける主を仰ぎ、やがて永遠の御国での礼拝にそのまま迎えられていく深遠さがあります。主日の礼拝、家庭礼拝、個人のデボーションは御国の民である証しであり、永遠の都につながる確信と希望を得る時です。

結論

救い主イエス・キリストを信じて、神の国の完成を待ち望み、天に国籍を持つ礼拝の民として信仰の生涯を歩みましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈と思想

黙示録の末尾は、終わりの日のキリストの再臨による究極の勝利と、その結果現れる新天新地の描写で終わる。本日の箇所はその新天新地の中心、神とキリストが支配する都「新しいエルサレム」の描写である。

テキスト

21・22 全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所黙示録の描く終末には、旧約のメシア預言の成就(神の民イスラエルの回復)と、新約において啓示された神の御子・小羊イエス・キリストの王国という両面がある。終末におけるエルサレムの回復はイザヤ(52・1)、エゼキエル(40章以下)等の見た幻だったが、聖所(神殿)が存在しない聖都は彼らの理解を超えていた。神殿は神の臨在を象徴し、神を礼拝するための場所であるが、新しいエルサレムには主なる神と御子イエス・キリストが臨在しておられるため、聖所は必要ない。十字架によって神と人との隔ての壁が取り去られた結果、「顔と顔と

を合わせて」神を見ることができるようになる(Ⅰコリント13・12、Ⅱコリント3・18)。神との隔てなき交わりこそが、救いの完成なのである。

23 日や月がそれを照す必要がない この表現は22・5でも繰り返され、強調されている。神の臨在は光そのものであり、他の光を必要とはしない(イザヤ60・19～20)。ここでは「闇」に象徴されるすべての苦悩も存在しないのである(21・3～4)。

24 諸国民は…地の王たちは… 新しいエルサレムでは、神の民に加えられた諸国民が登場する。終末のメシア王国が諸国民を支配するとの思想は旧約にも見られるが(イザヤ60・4～11)、ここでは異邦人もキリストにあって神の民、新しいイスラエルとされている(イザヤ60・3、ヨハネ10・16、エペソ2・14～19)。旧約のメシア預言に見られたイスラエル中心の神の国ではなく、イスラエルを長子として全人類が招かれている神の国の幻である。なお、国民(ギ)エトノス) は、国家よりもむしろ民族や文化的アイデンティティに関わる用語であり、5・9～10「あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、…彼らを御国の民とし、祭司となさい

ました。」と響き合う描写である。

25 都の門は、終日、閑ざれることはない 直接には「夜がない」ことが理由であるが、都が諸国民に対して文字通り「開かれている」ことの表現でもある(26、イザヤ60・11参照)。

27 小羊のいのちの書に名をしるされている者だけ 全人類が招かれている神の国の広さ(普遍性)と同時に、汚れた者は入れないというその聖さ(排他性)も示されている。終わりの日に全人類・全被造物が救われるという聖書の福音は普遍的な救いのメッセージであるが、普遍救済主義(信じなくても救われるとの思想)ではない。黙示録が繰り返す、この世との妥協や背教を戒めていることも思い合わせる必要がある。

22・1・2 いのちの水の川 いのちの木 エゼキエル47章の預言の成就であるが、創世記2章のエデンの園の回復というメッセージも強調されている。新天地・新しいエルサレムは最初の状態への復帰ではなく、さらに良い天地への更新である。

2 諸国民をいやす いのちの木の祝福が全ての人に開かれていることを示す。民族による差別のない、キリス

トにある真の平和の確立である。

3・4 彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見る 神の民は神との隔てのない交わり(礼拝)に招かれている。

5 彼らは世々限りなく支配する 「支配」は王としての支配を表す単語である。キリストの王国の民とされた人は、その王権の地上における代理者として生きる。創造における「地の支配」(創世記1・26)という人間本来の使命の回復である。

参考図書 時代背景と黙示録の思想については、岡山英雄『小羊の王国』、ボウカム『ヨハネ黙示録の神学』、ラッド『終末論』、スターク『キリスト教とローマ帝国』、『エウセビオス「教会史」』、ウォーカーやゴンサレスなどの教会史。注解書は、岡山『ヨハネ黙示録注解』、モリス(ティンデル)、Ladd (Eerdmans)、Beale (New International Greek Testament Commentary)、Osborne (Baker Exegetical Commentary)、Aune (Word Biblical Commentary)。

聖書

黙示録21・22～22・5

タイトル

神の国の完成

神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあ

かりだからである。

黙示録21・23

目 標

神の国の光景の素晴らしさを知り、キリストを信じてそこに入る者となる。

導入

(和田牧子)

みなさんのお友だちに「ひかりちゃん」とか「あかりちゃん」という名前の人はいいますか？ とっても素敵な名前ですね。もしこの世界に暗闇がなく、いつも明るかったら、楽しいことを一杯できそうですね。実は天国：神様の国はいつも明るく、光でいっぱいな所のようにですよ。

神様の都

みなさんにとって天国ってどんなイメージですか？聖書の一番最後には、天国の風景が手に取るように書かれています。イエス様の弟子のひとり、ヨハネがパトモス島というところで過ごしている時、神様が天国の様子を見せてくださいました。ヨハネが見た光景は、今ま

で見たこともないようなすばらしいものでした。

そこは天の都でした。都とは王様が住むお城のある場所です。天国の王様は主なる神様です。なんでもおできになる、すべての宇宙や世界、人間や動物、木やお花をお造りになった神様です。天国は神様の住まれる都なのです。

そこは太陽も月も必要のない世界です。神様の栄光：すばらしさがいっぱいに満ちており、小羊であるイエス様が都の光、あかりとなって照らしてくださっているのです、太陽や月がなくてもだいじょうぶなのです。天国に暗闇はもうありません。この世界にはいっぱい悩み、悲しみ、苦しみがありますが、天国ではその涙をぬぐいさつてくださると書いてありますよ。「もはや死もなく、悲しみも、さげびも、痛みもない」と。どんなにすてきなところでしよう！

小羊のいのちの書

この天国には門があります。その門はなんと一日中決して閉められないとあります。みなさんのおうちは夜には鍵をしめますね。天国には夜がないので、鍵をしめる必要がないのです。門はいつも開きっぱなしです。

そして、その門はすべての国の人々に開かれているのです。みんなはどんな国の名前を知っていますか。中国、アメリカ、ロシア、イギリス：日本！ どんな国の人でも天国に行くことができます。聖書の神様はすべての国の、すべての人の神様なのです。

しかし！ その門を通るために一つだけ条件があります。それは「小羊のいのちの書」に名まえを書かれている人だけ…という条件です。どんな人の名まえが書かれているのでしょうか？ イエス様の十字架はわたしのためですと信じ受け入れた人の名まえなのです。わたしは神様の前に罪びとですと認め、神様ごめんなさい、イエス様わたしの身代わりに死んでくださってありがとうございますと信じ告白した人の名まえです。どうでしょう？ みなさんのお名まえは書かれているのでしょうか？ みなさんの家族やお友だちのお名まえは？ わたしたちは天国に行けても、わたしたちの大切な人たちが天国に入れなかったら悲しいですね。だからイエス様のことをお伝えしなくてはならないのです。

天国での礼拝

それでは天国でわたしたちは何をするのでしょうか。こ

の世界では、イエス様は目に見えないかたでした。しかし天国ではイエス様のお顔を、この目であおぎ見ることができると書いてあります。大好きなイエス様のお顔を見ながら、みんなで賛美し礼拝することができます。す。なんだかとても楽しみになってきませんか。

ほんとうは私たちはイエス様の前に、ごめんなさいというなだれるしかできなかった者です。失敗や罪をいっぱい犯してきた者です。でもそんなわたしたちをお見捨てにはならないで、御子イエス様をこの世界にお送りくださいました。天国に入る道をイエス様によっていただいたのです。

結び

まだイエス様をはっきりと信じていなかったお友だちは、自分の罪をおわびして、イエス様の十字架を信じ受け入れましょう。もうすでに信じているお友だちは、天国に行ける日を楽しみにしながら、イエス様にしっかりとつながって生きていきましょう！

♪まもなくかなたの♪（イン107、ふ57、新聖歌475）

聖書 使徒14・8～18 テーマ ルステラでの宣教

序論

(小泉 創)

聖書には奇跡の場面がたくさんしるされています。人は奇跡を喜びますが、時として神の願われるのと違う受け取り方をしています。

一、歩く力を与えられる神

パウロとバルナバがルステラで出会った人は、生まれたときから足が不自由で、一度も歩いたことのない人でした。すわりながらパウロが語る福音に耳を傾ける中で、この人の中に救い主を求める思いが、生まれてきたのでしょうか。パウロはこの人に目を留め、その内にキリストを信じる信仰を認めたので、大声で命じました。「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と。この人はそのことばを受けいれて、今まで踏み出すことのできなかった足を踏み出してみると、足に力が入り、立ち上がることができました。喜びにあふれ、躍り上がって歩き出しました。神の御力があらわされたのです。

この人の癒しは、キリストへの信仰のゆえでした。神は人を罪の内から救うとともに、新しい力を与えて歩き出させることができるお方です。

二、むなしものから自由になる。

その場に居合わせた人々は、いやされて立ち上がったこの人のことを良く知っていたことでしょう。ですからこの出来事に驚いて、その地方の言葉で「神々が人の形でおくだりになった」と叫びました。彼らは、バルナバはゼウス、パウロはヘルメスという神々の化身であり、この奇跡は彼らの力だと自分たちなりに理解したのです。そして自分たちの祭司を呼んで犠牲をささげようとなりました。私たちの周りにもこのような偶像礼拝はあふれています。

また、逆に私たちも神のための働きをしながらも、人から注目され、賞賛されたいという誘惑を感じることがあるかもしれませんし、自分のなした働きが誰の目にもとまらずにつまらないと思うことがあるかもしれません。しかしすべてのことは主の力によってなされたのですから、自分がほめられる必要もないのです。まるで自

らの力でなしたかのように誇ることは、主の栄光を横取りすることになります。神がしてくださったことを喜び、「わたしたちはふつつかな僕です。すべき事をしたに過ぎません」（ルカ17・10）と言わせていただきたいのです。

パウロとバルナバは今起きていることに気付いたとき、上着を引き裂き、声を張り上げて、人々の魂に語り掛けました。神のなさったことを、愚にもつかない、むなししいものに結び付け、しかも自分たちをその神としてあがめようとする姿に、胸が焼かれる思いがしたのでしよう。

三、恵みの神に立ち返る。

人々は身体の癒しという奇跡に目を見張りましたが、それだけが神の恵みのあらわれではありません。日々、すべての人を生かして下さるのもただ一人の神の恵みによるのです。雨もみのりもこのお方によって豊かに与えられているのですが、罪びとは神への感謝を忘れて、見当違いの方向を見ている。

だから今、その生ける神に立ち返るようにとパウロは

叫び、人々の偶像礼拝をとどめました。神に従って歩む経験のない者を罪の内より立ち上がらせ、神のために働く者につくりかえて下さるために、キリストは十字架で死なれ、よみがえられたのです。この恵みによってすべての者は、神と共に歩く者につくりかえられるのです。

結論

むなししいものにたよらず、いまま生きておられ、すべてのものを生かしてくださる神を信じて、その恵みの中を歩き続けましょう。

研究資料

(辻林和己)

使徒14章は、前の章から始まった「パウロの第一次伝道旅行」での出来事が記されている。ユダヤ人からの迫害によってアンテオケを追い出されたパウロとバルナバ(使徒13・50)は、そこから150キロほど南東にあるイコニオム(小アジアの南部にある)という町に行き、そのユダヤ人の会堂で福音を伝えた。その後、彼らはルステラとデルベの町に移動する。

テキスト

8 ルステラ イコニオムの南40キロにある。

9 この人がパウロの語るのを聞いていたが 美しの門のところにいた生まれつき足の不自由な人は、「何かもらえるのだろうか」と期待して、ふたりに注目していた(3・5)が、この人はパウロの説教に耳を傾けていた。

語られた言葉を通して彼の内に主イエスを神の御子と信じる信仰の種がまかれていた。いやされるほどの信仰が彼にあるのを認め パウロはこの熱心に耳を傾ける男性の中に、彼の信仰の純粹さと真実さを見て取った。

10 彼はパウロの命令を素直に受け入れ、従った。その結果、癒された。踊り上がって 「飛び上がって」(新改訳)。

原文では「(直ちに)飛び上がる」という意味の動詞(ギ)ハロマイ)の不定過去形が用いられている。歩き出した 原語では動詞(ギ)ペリパテオー)の未完了形が使われている。歩き続けたことを意味している。

11 群衆はパウロのしたことを見て 群衆は起こった奇蹟がパウロ自身の力によるものと誤解した。そしてパウロとバルナバを神々の化身だと思った。

12 ゼウス ギリシヤ神話の主神。ヘルメス ゼウスとマイヤの間に生まれた子で、神々の使者。群衆は年長者のバルナバをゼウスに、雄弁なパウロをヘルメスに見立てた。

14 自分の上着を引き裂き 神を汚す行為への怒りと嫌悪を示す。

15 あなたがたと同じような人間である 神は神であり、人は人である。その厳正な区別をあいまいにすることから偶像礼拝が生じる。愚にもつかぬもの 原語は形容詞(ギ)マタイオス)の名詞的用法。新改訳では「むなしなこと」、新共同訳では「偶像」と訳されている。天と

地と海と、…生ける神 パウロはまことの神が万物の創造主であることを語る。立ち帰るようにと、福音を説いている。「立ち帰り」は原語では(ギ)エピストレフォアの不定法が用いられている。Iテサロニケ1・9の「立ち帰り」とほぼ同じ意味で用いられている。伝道とは、偶像礼拝から離れ、生ける神に立ち帰れと、語り伝えることである。その悔い改めを可能にする唯一の道が主イエスの福音である。

16 神は過ぎ去った時代には、…パウロは、この個所ではこれまでの時代における神の寛容を語る。アテネでの宣教におけるパウロの言葉を参照(使徒17・30)。

17 ご自分のことをあかししないでおられたわけではない この節の後半で、神がご自身の存在とその恵みを証明しておられることを具体的に示す。心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになっているのである。雨や季節の変化も神の恵みであり、実りや食物、喜びで心を満たされる。それらも神のご慈愛とご配慮である。

ルステラでのこの説教は、人々に偶像礼拝から離れ、まことの神に立ち返らせるための警告であった。

18 こう言って、ふたりは、やっとのことで、…思い止

まらせた パウロとバルナバはようやくの思いで、興奮していた群衆をしずめることができた。ここでは出来事が短く記述されているが、実際には、もつと長い時間の中での言葉のやりとりや人々の動きがあったと考えられる。二人が「やっとのことで」いけにえを中止させたことから、この説教が本来の福音宣教(主イエスの十字架と復活を伝え、悔い改めと信仰に至らせる)ではなく、説教の中心は天地の創造主なる神、私たちに必要なものを与えて下さる恵みの神を証しすることであったことが伺える。

この説教に関しては別の解釈もある。I・H・マーシャルは、「この部分(主イエスの十字架や再臨)(上記括弧内は筆者補足)が省略されているからといって、パウロがこれについてまったく触れなかったとは言えない。…」と述べている(『使徒の働き』『ティンデル聖書注解』いのちのことば社 287頁)。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『新実用聖書注解』、斎藤篤実「使徒の働き」『新聖書注解 新約2』(以上いのちのことば社)、他

聖書

使徒行伝14・8～18

タイトル

神様ありがとう！（収穫感謝）

暗唱聖句

食物と喜びとで、あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになつてゐるのである。使徒行伝14・17

目標

世界を治め、食物を備えてくださる眞の神を信じる。

導入

（松浦みち子）

教会では、11月第4聖日に収穫感謝祭を行うことがあります。この行事の言い伝えを、まずお話しましょうね。今から400年ほど前のことです。イギリスの国からメイフラワー号という船に乗って、コロンブスが発見した新大陸アメリカのプリマスに移住してきた人々がいました。その年、一六二〇年の冬はとても厳しく、作物も実らず、飢えや病気で約半数の人が亡くなったと言われています。原住民のインディアンにトウモロコシやジャガイモなどの栽培の仕方を教えてもらい、一六二一年の秋にはやっと収穫を得ることができたのです。そこで、人々は喜び、収穫を感謝し、お祝いしたのが始まりです。

そして、アメリカからの宣教師たちによってこの行事が伝えられ、日本の教会でも収穫感謝祭を行うようになりました。

パウロの伝道旅行

ある時、パウロとバルナバはイエス様を伝える伝道旅行に出かけることになりました。教会の人々が「神さま、どうぞ二人を守ってください。」と祈ってくれました。「行ってきます！」と元気よく出発しました。二人はいろいろな町で、ユダヤ人にも外国人にもお話をしました。「みなさん、イエス様は救い主です。十字架にかけられましたが、三日目によりがえりました。イエス様を信じれば、罪がゆるされて天国に行けます」と。たくさんの方がイエス様を信じて、神様の子どもになりました。しかし、信じない人々は、パウロやバルナバを憎んで、殺してしまおうと相談を始めました。そこで次の町へと向かうことになりました。

ルステラの町で

ルステラの町にきた時のことです。ここに生まれつきの不自由な男の人がいました。この人は一度も歩いたことがなかったのですが、イエス様のことを知りたくて

だれかに運んできてもらったのでしょね。パウロの話すイエス様の話をじつと熱心に聞いていました。この人の心には、「イエス様は、このわたしの動かない足をきつと治してくださるにちがいない!」という信仰が芽生えているようでした。それに気づいたパウロは、じつと彼を見つめて、大きい声で「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言いました。すると、その人は飛び上がるようにして立ち、しっかりと足取りで歩きだしたのです。その様子を見ていた群衆は、ビックリして目を丸くして声を張りあげました。「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお下りになったのだ」。バルナバを指さして「あれはゼウス様だ」「もう一人はヘルメス様だ!」と叫ぶのです。この町の人々はまことの神様を知らなかったのです。パウロとバルナバを、自分たちが拝んでいるゼウスの神様だと勘違いしたのです。たいへんな騒ぎとなりました。すると、ゼウス神殿の祭司が、ふたりに犠牲をささげようと、数頭の雄牛と花輪を持って来ました。

偶像礼拝をやめさせる

パウロとバルナバは大慌てで群衆の中に飛び込んで行

き、必死で礼拝を止めさせようとなりました。人間を拝むなんてとんでもないことです。

「皆さん、なぜこんな事をするのですか。わたしたちも皆さんと同じ人間です。わたしたちは、皆さんにほんとうの神様を信じてほしいと思って伝えにきたのです。皆さんは、今までまことの神様を知らず、自分勝手な道を歩いてきました。しかし、まことの神様は生きておられ、ご自分のことをあかしし続けておられるのです。そのことはどうしてわかるでしょうか。なぜなら、神様は、あなたがたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与えて作物を育ててくださっています。そして、食べ物を与えて喜ばせ、わたしたちの心を満たしてくださるなどして、いろいろの恵みを与えてくださっているではありませんか」。こう言ってやつとのことで偶像礼拝を止めさせることができました。

このような伝道旅行は、使徒行伝に三回もされたと記されています。今も福音を伝える伝道の業は、世界中で続けられています。あなたもこの素晴らしい働きに参加しませんか?

♪主にしたがいゆくは♪ (コ 53、ホ 87、イン 85他)

聖書 ルカ1・8〜25、57〜66 テーマ 答えられた祈り

序論

(金井信生)

今日からキリストの御降誕を待ち望むアドベント(待降節)に入ります。私たちは祈りの中で、さまざまのことを待ち望みますが、祈る心において十分だったか、ザカリヤの姿から振り返られます。

一、祈りと信仰

ザカリヤのもとに現れた御使いは「あなたの祈が聞きいれられたのだ」と告げています。子どもが与えられるように、とザカリヤは祈ってきたからです。当時のユダヤでは、子どもが多いことが神の祝福のしるしだと考えられていました。現代のように、子どもがいてもいなくてもどちらでもいいと考える人が出てくるような時代とは違います。

祭司として敬われていたザカリヤとエリサベツにとって、子どもがなかなか与えられないことは大きな痛みでした。そのザカリヤという名前も、「主は覚えておられた」という意味ですから、これまでは重荷だったでしょう。

う。

しかし、祈りは聞かれ、主の答えが届けられました。ところが、御使いの言葉に対してザカリヤは信じ受け入れることができませんでした。年月が経ち、夫婦は老いていたからです。

ザカリヤとエリサベツ、年は取っていましたがおそらく100歳と90歳ということはないでしょう。アブラハムとサラ夫婦に主がイサクを与えられたことを考えれば、決して不可能ではありません。

聖書の言葉を読んでも、同じ神が今も生きて働いておられることを、私たちも信じているでしょうか。アブラハムの神は私の神だと祈りの中で申し上げているのでしょうか。

信仰がなくては祈り始めることはできません。そして祈り続ける中で信仰は養われ、強められていきます。

二、祈りは聞かれる

御使いは主のそばにいて、そのみわざをよく見ていますから、「祈りが聞かれたのだ」と告げ、さらに生まれる子に与えられている、主からの使命についてすらすらと述べていきます。しかし、ザカリヤの耳に、後半の言葉

は入っていないでしょう。「子どもが生まれる?」、驚きで心がいっぱいになってしまいました。

主は私たちの祈りをすべて聞いておられます。この待降節、私たちは旧約の聖徒たちがメシアを待ち望んで祈っていたように、主キリストの再臨を待ち望む祈りを新たにします。

イエスは、「失望せずに常に祈るべきこと」(ルカ18:1)を、不義な裁判官に対するやもめの執拗な祈りのたとえを通して教えられました。その終わりの言葉は「しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」です。私たちも信仰をもって祈り待ち望むよう命じられています。

旧約時代の、長い救い主待望の祈りは聞かれ、キリストは世に来られました。再臨待望の祈りは聞かれ、やがて再びキリストはこの世に來られます。私たちの祈りも、この大きな神の救いのご計画の中に置かれ、聞かれているのです。「祈りは聞かれる」。単純に信じ、経緯も結果も委ねながら祈り続けましょう。

三、祈りのゴールは主への賛美

不信仰のために口がきけなくなっていたザカリヤの口

が開かれたとき、まず賛美があふれ出しました。

その賛美は、ただ子どもが生まれたことの感謝と喜びだけでなく、これからの生涯の使命をはっきり受け止めてさざげられています。

祈りは神との対話です。長電話して一方的に切るようなことをしていないでしょうか。

「主の力を信じてるから、どんな時もあきらめない。祈りはすでに聞かれてる、だから感謝しよう、さんびしよう」(プレイズワールド25)。

祈りが聞かれたから感謝し、賛美しよう。初めはそれでもいいかもしれません。でも、だんだんと信仰が養われ、育てられる中で、「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい」(マルコ11・24)と実践し、主はすでに聞いておられます、と先取りの賛美をささげるものにならせていただきますよう。

結論

祈りは主が聞いておられ、主の全知全能の御手の中で答えられています。その答えを素直に受け止める信仰に立ちましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

8〜10 その組 アビヤの組(5)。祭司には24の部族があり、各部族は半年ごとに一週間ずつ神殿で奉仕し、くじ引きによって奉仕する組が決められていた。香をたぐことは一生に一度あるかないかの奉仕で、くじ運によっては一生涯に一度もこの務めが与えられない祭司もいた。

13 ザカリヤ 「主は覚えておられた」という意味。エリサベツ 「わが神は誓い」という意味。ヨハネ 「主はいつくしみ深い」という意味。

13〜16 この箇所はヨハネがナジル人であるということを示唆している。ナジル人については民数記6章、士師13・4〜5、サムエル上1・11等参照。ヨハネは終生存在そのものが「主の前」にあることを示している。

17 ユダヤ教徒は、エリヤが文字通り肉体をとって再来すると信じていた。しかし、ヨハネは、このような意味でのエリヤの再来ではない(ヨハネ1・21)。彼は、「エリヤの霊と力で」働く者であり、「受けいれることを望め

ば、この人こそは、きたるべきエリヤなのである」(マタイ11・14)。

18 どうしてそんな事が 新改訳聖書では「何によってそれを知ることができましようか」とあるように、不信の問いと言えるであろう。彼はしるしを求めてこの問いを發したのである。

19〜20 ガブリエル 神は力強い、という意味。聖書中、名前で呼ばれている御使いは、このガブリエル(19、26、ダニエル8・16、9・21)とミカエル(ダニエル10・21)だけである。このガブリエルがザカリヤに伝えたのは、喜ばしい知らせであつた。しかも、ザカリヤにとつては長年の祈りが聞き入れられた知らせでもあつた。しかし、ザカリヤはそれを信じるのができなかったのである。□がきけなくなり ザカリヤの□がきけなくなったのは天罰によると考えるべきではない。そうではなく、神の約束が成就するまでの間、ザカリヤは主の前に静まる必要があつたからである。

57節からは、いわゆる「ベネディクトゥス」といわれるザカリヤの預言歌(67〜79節)の導入となる部分である。

57 月が満ちて ルカがしばしば用いた表現。特に、神の約束の成就という意味合いにおいてこの言葉が用いられることがある(1・23、2・6、21・22など)。

58 大きなあわれみを 直訳すると「あわれみを大きくされた」(創世記19・19、サムエル上12・24)。エリサベツは妊娠後、引きこもっていた(1・24)。また、それゆえ近所の人々もこの妊娠を知らなかったと考えられる。またエリサベツの出産は、男子の出産であり、また不妊で高齢の出産であったがゆえに、一層この出産が喜ばしい出来事となったのであろう。

59 ユダヤ人は、その生まれた男の子に、アブラハムの故事にちなんで、生後8日目の割礼と同時に命名することが多かったようである(創世記17・5、12、21・3・4、ルカ2・21など)。また、パレスチナにおいては、名前は説明的な意味合いを持っていたと言われている。あるいは「名は体を表す」という言葉のとおり、旧約において、名はしばしば重要な事件の記念、またはその人物の使命や役割を啓示していた。

60 ヨハネ 「主はいつくしみ深い」という意。聖書では、本来この名の由来を知らないはずのエリサベツが、

なぜ知っていたのかは記されていない。ザカリヤが神殿内での出来事と御使いの告げた事柄を、自らの悔い改めと共に ^{あらかじ} 予めエリサベツに書いて知らせたのか、あるいはエリサベツにも御使いが現れたのかは、定かではない。

61・63 合図で(62)とあるが、「身振りで」(新改訳、「手振りで」(新共同)とあるところから、ザカリヤは、口がきけなかっただけではなく、耳も聞こえなかったことも推測される。口がきけない(ギ)コーフォス)とは、聖書の別の箇所では、耳が聞こえない、とも訳されている(7・22他)ことからそう推測できる。

64 神をほめたたえた ザカリヤの口が開かれた瞬間、まず彼の語った言葉は、神殿内での状況の説明ではなく、神への賛美だったことは注目される。ザカリヤは、「不思議」の経緯やヨハネの名の由来を語ったのではなく、ただひたすら神をほめたたえたのである。この言葉は、後のベネディクトゥス(68・79)へとつながる。

参考図書

A. T. Robertson, Word Pictures in the New Testament Volume II, The Gospel According to Luke (Broadman) 他

聖書

ルカ1・8〜25、57〜66

タイトル

答えられた祈り

暗唱聖句

恐れるな、ザカリヤよ、あなたの祈が聞き入れられたのだ。
ルカ1・13

目標

祈りが聞かれたとき、素直に受け止める信仰を持つ。

導入

(後藤 真)

今日から待降節（アドベント）です。アドベントとは「わくわくしながらクリスマスマスの準備をするとき」ではありません。もういちど来られるイエス様を待ち望むときです。みなさんの心はイエス様に向いていますか。イエス様に会えることを楽しみにしていますか。

ザカリヤと天使

さて、ザカリヤは礼拝の仕事をする祭司でした。その日ザカリヤは、聖所という特別な場所に入り、特別な礼拝をする当番に当たっていました。ザカリヤが礼拝のつとめを果たしていると、主の御使い（天使）が立っているではないですか！ こわくなってブルブル震えているザカリヤに天使が言いました。

「こわがってはいいませんが、ザカリヤ。あなたの祈りが聞かれたのだ。あなたの妻エリサベツは男の子を産む。その子をヨハネと名づけなさい。あなたもみんなもその子の産まれたのを喜ぶだろう。彼は神様の前に立派な人になる。お母さんのお腹の中にいるときから聖霊に満たされて、イスラエルの人々を神様に立ち返らせ、人々を神様の前に整えるのだ」。

これを聞いたザカリヤは、大喜び、とはなりませんでしたが、ずっと子どもを与えてくださいと祈ってきたのです。神様の前に正しく生きてきて祭司の仕事もちゃんとやってきました。お祈りが聞かれたのにザカリヤは喜ぶどころか

「わたしたちは年をとっているのにどうして子どもが生まれると分かるでしょうか」。

と、天使のことばを信じませんでした。

「わたしは神様の前に立つ天使ガブリエルだ。あなたがこのことを信じなかったから、その日が来るまであなたはしゃべることができなくなる」。

そう天使が言うと、ザカリヤは何も言えなくなったのです。

ヨハネが産まれた！

ザカリヤは何もしゃべることができないまま毎日をごしました。おしゃべりできないなんて、とても不自由だったと思います。でも神様はザカリヤに罰を与えたのではないでしょう。神様の計画よりも自分の考えが先にでてしまうザカリヤに、静かになって神様のことを受け止め、信じてほしいと思つてしばらくしゃべれないようにしたのではないかと思います。

でも、その日はついに終わります。「オギャー！」と元気な男の子がエリサベツのもとに産まれたのです。「エリサベツに赤ちゃんが産まれたわ」「年をとっていたのにすごいわね」と、近所の人も親戚も大喜び。

そして産まれて八日目。赤ちゃんに名前をつける日になりました。みんなはお父さんと同じザカリヤという名前にするように言いましたが、エリサベツは「この子の名前はヨハネよ」というのです。

「お父さんのザカリヤに聞いてみよう」と、ザカリヤに合図を送るとザカリヤは板に

「その子の名前はヨハネ」

と書きしました。するとすぐにザカリヤはしゃべれるよう

になったのです。

あふれる賛美

しゃべれるようになったザカリヤは神様をほめたたえました。もう神様をうたがう気持ちはありませんでした。ザカリヤの心にあつたのはヨハネが産まれたことへの感謝だけではありませんでした。天使が教えてくれたとおりヨハネがイスラエルのために大切な仕事をする人になることを信じて神様をほめたたえたのです。

神様は必ずお祈りを聞いてくださっています。無理だらうなあとわたしたちが思うことでも、神様は聞いてくださっています。そして、必ずお祈りに答えてくださいます。わたしたちが思っていたのとは違う答えのときもあります。神様のくださるお祈りへの答えが素晴らしすぎて、信じられないような気持ちになるとときもあります。でも、どんな答えでも喜んで受け止め、神様を賛美する人になっていたきましょう。いつも神様は最もよいものを用意してくださるのです。

♪主のちからを♪(PW25、イン71)

聖書 ルカ1・67〜80 テーマ ザカリヤの讃歌

序論

(小泉 創)

バプテスマのヨハネの誕生にはたくさんの不思議な出来事がありました。高齢であるエリサベツの突然の妊娠、祭司ザカリヤの口がきけなくなったこと、名をつける際、ザカリヤが語り始めたこと。これらの一連の出来事を伝え聞いた人々は、「この子は、いったい、どんな者になるだろう」と語り合うのも無理のないことです。

しかし神はヨハネ自身をあげられる人物にしようとしておられたわけではありません。彼には神の恵みのわざである救い主を指し示すという使命が与えられていました。聖霊に満たされたザカリヤがそのことを告げられて預言したのが、今日の聖書箇所、ザカリヤの賛歌（ベネディクトゥス）です。

一、神は救う

神は人を救ってくださいます。すべての人は救いを必要としていますが、そのことにも目が開かれていません。

しかし罪と死の泥沼の中で息も絶え絶えになっている人を、希望を見いだせず孤独の涙を流す人を、神は捨てておられません。

すべての人をおびやかす敵とは誰でしょう。異邦人でも、ローマ帝国でも、他宗教でもありません。死と滅びであり、その背後にある悪魔です。悪魔は全ての人を憎み、暗黒と死の陰との中に閉じ込めようとしています。そして人は神との平和を失ってしまっています。神が救って下さらなければ、自分の力で死と滅び、悪魔の手から逃れることはできません。

二、約束の通りに

神の救いはイスラエルの人々に約束された通りになされました。

- ① ダビデの家にキリストは来られました。
- ② 聖なる預言者たちの口で語られたとおりに。
- ③ 父祖アブラハムとの誓いのとおりに。

旧約聖書と新約聖書は一貫しています。旧約の土台の上にキリストは来られました。ですから、イエス以外の他の誰かがキリストに成り代わることなどありえませ

ん。

現代も、自分が再臨主、キリストであると自称する者が雨後の筍のように乱立しています。彼らの聖書解釈はでたらめですが、それでもそのような異端に若い人たちが取り込まれています。私たちはイエス・キリストだけが聖書が約束したとおりの唯一の救い主であることを告白しましょう。そして子どもたちにもそのことを伝え続けてまいりましょう。

三、救われて、仕える

ザカリヤは生まれたばかりのヨハネと名付けられた子を見つめながら、「幼な子よ」と語り掛けました。ザカリヤは聖霊によってヨハネに与えられた使命を理解していました。それは「いと高き者の預言者」として、主の御前に立つてその道を備え、キリストを指し示すことでした。キリストと出会い救われた者たちは、「生きています限り、きよく正しく、みまえに恐れなく仕えさせて」いただけるのです(75節)。私たちは他の宗教のように、恐怖におびえてしぶしぶ神に仕えるものではありません。神のあわれみによって、他にはない素晴らしい愛をこそが

れ、すべてをゆるされた喜びを味わうのです。そして神との間に平和をいただいたので、喜びと感謝をもって従って行くことができますのです。罪と死と滅びの闇の中にすんでいた者が、キリストによって光の中に連れ出していたので、そこにとどまり続けるのです。

結論

バプテスマのヨハネを通して、キリストが指し示されました。この方以外に救い主はおられません。神のご真実をはめたたえましょう。そして私たちも喜びをもって仕え続けましょう。

研究資料

(辻林和己)

祭司ザカリヤは御使いから、妻エリサベツが男の子を産むと告げられたがそれを信じる事ができなかった(ルカ1・18)。その不信仰の罪ゆえにものが言えなくなっていたが、誕生した男の子に御使いが告げた名前を付けたとき、舌がゆるみ、神をほめたたえた。(ルカ1・63〜64)。今回の個所では、ザカリヤが預言した言葉が記されている。「ザカリヤの賛歌」と呼ばれている。この賛歌はラテン語訳聖書では、「ほむべきかな」(68)に当たる言葉「ベネディクトゥス」が冒頭に來るので、このようにも呼ばれる。

テキスト

67 聖靈に満たされ 旧約の預言者や王たちに神の靈が働きかけられたのと同じことがここで起こったと考えられる(民数記24・2、サムエル上10・10、11・6等参照)。
預言して ここでは、神の靈(聖靈)によって言葉を与えられ、主なる神のご計画とみこころを告げ、神を賛美するという意味で用いられている。

68 神はその民を顧みて ザカリヤが神を賛えたのは、神がイスラエルを顧みて下さったからである。旧約時代も神がエジプトで苦しむイスラエルの民を「顧み」て下さった(出エジプト4・31)。**あがない** 「贖う」は元来「失われたものを代価を払って買い戻す」という意味。出エジプト記では6・6に初めて「あがなう」という語が出てくる。エジプトの奴隷となっていたイスラエルの民を、神は代価を払って買い戻された。そこからこの語は「解放する、救う」という意味で用いられるようになった。ザカリヤは出エジプトの出来事に現わされた神の救いのみわざの歴史を回顧しつつ、今このとき、救い主を遣わし、イスラエルを救おうとしておられる神を賛美する。

69 救の角 「力ある救い」という意味。「角」は力の象徴(申命記33・17参照)。ここではメシア(救い主)を示す。**僕ダビデの家** 神はイスラエルの救いをダビデ王の子孫を通して実現される(詩篇89・3〜4参照)。

73 父祖アブラハムにお立てになった誓い 神がアブラハムになされた約束(創世記12・2〜3、7、ガラテヤ3・16参照)。**おぼえて** 原語では「お忘れにならず」(ル

カ1・54)と同じ語(ギミムネースコー)である。神の不変の顧みを表す。

74 敵の手から救い出し 71節と共に出エジプトの救いを想起させる。69～75節の底を流れているのはイスラエルの民の出エジプトという救いの出来事である。今、メシヤによる新しい出エジプトがまさに始まるうとしている。

75 生きている限り、…仕えさせてくださるのである 神が救い主を通して、私たちを生涯、神に仕える者として下さる。

76 幼な子よ 自分の息子ヨハネへの呼びかけ。いと高き者 至高者としての主なる神。主のみまえに先立って行き、その道を備え ザカリヤはこの男の子(後の洗礼者ヨハネ)の使命を預言する(ルカ3・4参照)。

77 罪のゆるしによる救をその民に知らせる 「罪の赦しによる救い」(新改訳)は、ルカ福音書、使徒行伝に一貫して流れている基本主題の一つである(「罪のゆるしを得させる悔改め」ルカ24・47、「罪のゆるしを得るために」使徒2・38)。ここでは罪の赦しによる救いを実現される主イエスをイスラエルの民に証しする洗礼者ヨハネ

の使命が語られている。

78 神のあわれみ深いみこころによる 「あわれみ深いみこころ」の原語の直訳は「あわれみのはらわた(内臓)」というへブル的表現。前節の「罪のゆるしによる救」の根源は「神の深いあわれみ」(新改訳)である。日の光救い、あるいはメシヤ(救い主)を指す(イザヤ9・2、マラキ4・2参照)。

79 暗黒と死の陰とに住む者を照し イザヤ9・2に基づく言葉(マタイ4・16参照)。メシヤによる「罪のゆるしによる救」はイスラエルの民だけでなく、「異邦人」(イザヤ9・1)にももたらされる。

80 荒野 死海西方に広がるユダの荒野。ヨハネは「エリヤ」(1・17)のように荒野で整えられる(列王上19・4～8参照)。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『新実用聖書注解』、榊原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解 新約1』(以上のいのちのことば社)、他

聖書

ルカ1・67〜80

タイトル

ザカリヤの讃歌

暗唱聖句

生きている限り、きよく正しく、みまえ

に恐れなく仕えさせてくださるのであ

る。ルカ1・75

目標

救われた者として喜びをもって神に仕える者となる。

導入

(後藤 真)

アドベント（待降節）第二週です。クリスマスが近づいてきてそわそわしている人もいるかもしれません。でもアドベントは、イエス様が来られるのを待ち望むときです。イエス様がもういちど来てくださることを思い、心を聖書のことばに向けましょう。今日は先週に続いてザカリヤのことをお話します。

預言を始めたザカリヤ

お祈りが聞かれ、ザカリヤには子どもが生まれました。子どもはヨハネと名付けられました。ザカリヤははじめ子どもが生まれると天使が教えてくれたのに疑ってしまいました。それでヨハネという名前が決まるまでしゃべ

ることができなかったのです。しゃべることができるようになったザカリヤは神様をほめたたえ、まわりの人たちも神様をあがめました。そしてザカリヤは聖霊に満たされて預言を始めます。預言とは、神様からいただいたことばのことです。ザカリヤは自分の考えではなく、神様の思いを受け止めてこんなふうに話したのです。

救い主が立てられる

「神様はほめたたえられる方です。イスラエルの民があがなってくださいます。わたしたちのために救いの角をしもベダビデの家にお立てになりました。」

救いの角。これこそが力強い救い主のことです。神様は救い主をダビデの子孫の家から生まれさせると約束してくださったのです。続けてザカリヤは預言します。

「このことは昔から預言者によって語られていたとおりに、わたしたちを敵から救い出すためです。これはアブラハムと約束して誓ったことでした。」

何ということでしょう。神様はアブラハムと約束したことを忘れていなかったのです。イスラエルの人たちは何度も神様に背き、裏切ったのに、神様はアブラハムに約束したとおりにイスラエルの人々を救ってください

のです。ザカリヤは続けて預言します。

「そして生きている限り、きよく正しく、神様に仕えさせてくださるのです。」

神様が敵から救ってくださるのは、安心して神様を礼拝する者とされるためです。救い主は、ただわたしたちをピンチから助けてくださるだけではありません。わたしたちが心から神様を礼拝し、神様の喜ぶことをして生きたるように、わたしたちを変えてくださる方です。

ヨハネの働き

ザカリヤはヨハネが生まれたことで喜びがいっぱいでしたが、まず救い主のことを預言しました。続いて、生まれた子ども、ヨハネのことを預言しました。

「幼子（ヨハネ）よ、あなたはいと高き者の預言者と呼ばれる。主の前に先に行き、主が来られる道を準備し、罪のゆるしによる救いを、民に知らせるのだ。」

ヨハネのちにバプテスマのヨハネと呼ばれます。救い主イエス様が来られる前に、悔い改めと罪のゆるしを教え、洗礼をほどこします。ヨハネは、救い主が来られるためのたいせつな準備をする人として、選ばれたのです。そのころのイスラエルの人たちは「わたしたちはイ

スラエル人だから、神様に特別に選ばれ、救われるのだ」と思っているところがありました。でもヨハネは、だれでも罪を悔い改めてゆるしていただかなければ救いがないということをしつかりと教えたのです。

救い主が来られること、ヨハネがその準備をすることは、神様の深いあわれみでした。そのころローマという大きな国に治められ、神様を信じて生きること難しく暗闇の中にいるようなイスラエルでした。でも神様が救い主という光を照らしてくださいました。神様といっしょに生きるときに、わたしたちは本当の平和に導かれるのです。

ザカリヤが預言した救い主、イエス様はわたしたちの救い主です。クリスマスに来てくださり、十字架にかかり、よみがえり、わたしたちを救ってくださいました。わたしたちは、ただ罪がゆるされてホッとするだけではなく、もう一度来られるイエス様に会える目を樂しみに待ちながら、きよく正しく、神様を礼拝し、神様の喜ぶことを毎日考えながら、神様に仕えて生活したいと思います。

♪すばらしい神様♪ (PW23)

聖書 ヨハネ1・1～5、9～14 テーマ すべての人を照らす光

序論

(福井文彦)

クリスマス之夜、大きな星がひときわ輝いたという出来事は、私たちに心温まる思いを与えてくれます。ヨハネは、福音書の冒頭で〈すべての人を照すまことの光があつて、世にきた〉と、キリストの誕生を紹介しています。この光であるキリストを信じ受け入れるとき、私たちは新生し、神の子とされるのです。

一、いのちなるキリスト

ヨハネは、キリストのことを〈初めに言があつた〉と、「キリスト」と言わないで、「言」と表現しました。当時、すでにキリスト教がユダヤ人の間だけでなく、異邦人の間にも広がっていました。ですから、彼らには、「言」すなわち「ロゴス」の方がよく理解できたのです。

この「言」であるキリストは、〈初め〉から存在されたお方でした。それは、時間の最初、歴史の最初という意味ではありません。時間が始まる以前、つまり創造のみわざを開始されたその時からご存在されたお方でした。

(3)。このキリストは〈神と共にあつた〉お方です。すなわち、キリストは永遠の神であり、父なる神と永遠の交わりの中におられたお方なのです。

〈この言に命があつた〉とは、単なる法則や原理のようなものではありません。この命は、肉体的命、霊的な命、永遠の命です。キリストを信じるとき、命が与えられ、死から命へ移されます(ヨハネ5・24)。〈そしてこの命は人の光〉でした。〈やみはこれに勝たなかつた〉のです。闇の中に光が差し込んでくると、闇は姿を消します。しかし、光の中に、闇は入ることはできません。闇が光を駆逐することはできないのです。

二、光なるキリスト

〈すべての人を照すまことの光があつて、世にきた〉とあります。キリストの来臨は、私たちに神を現わし、啓示するためでした。光は物を照らして見えるようになります。そのように、光なるキリストによって、心の目が開かれて、彼を通して、神がはつきりわかるようになるのです。

また、キリストは、闇の中にいる者に光を与えます。ヨハネによる福音書には、光を与えたイエスの業が二つ

記されています。その一つは「罪を赦された姦淫の女」(8章)のことで、もう一つは「光を与えられた盲人」(9章)の出来事です。

「姦淫の女」の話は、二重の意味で人間の暗黒を表しています。一つはイエスと女を訴えている群衆で、彼らは自分の罪を棚にあげて、ただ訴えているのです。もう一つの暗さは、罪を犯した女です。彼女は自分の罪が白日の下にさらされて、身の置きどころもなかったと思います。しかし、キリストは彼女に「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい」(8・11)と言われました。キリストの十字架は、今も信じる者の心に、どんな罪も赦される、闇に打ち勝った光として輝いています(5)。

三、キリストを受け入れる者の特権

〈まことの光〉の、〈まことの〉という言葉は、ギリシャ語では「アレーシノス」で、「真実な」とか「本当の」という意味です。キリストは、暗黒の世界に輝く唯一本当の光として来られました。

しかし、この世の人々はキリストがこの世に来られた時、キリストを認めることができませんでした。それは、人間が罪を犯し神から離れているため、キリストを認め

たくなかったのです。別の言い方をすれば、霊的に盲目な人は偏見をもっていて、真理に敵対してしまうのです。

ですから、キリストが〈自分のところ〉に来られたのに、ご自分の民は受け入れませんでした。ここで〈自分のところ〉とは「ご自分の国」のことで、イスラエルのことです。それで、イスラエルの民はキリストを信じることなく、十字架につけて殺してしまいました(マタイ21・33〜40)。

しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。〈力〉とは特権(新改訳)、資格(新共同訳)の意味です。たといだれであっても、謙虚にキリストを知り、この世界の主、また自分の救い主として受け入れる人は、神が恵みによって、神の子どもとしての特権を与えてくださいます。

結論

イエス・キリストは、すべてを照らす光としてこの世に来てくださいました。彼は神を現わし、それだけでなく罪を赦し救い、神の子となる特権を与えてくださるのです。

研究資料

(井上義実)

ヨハネが記す神が人となられた受肉、イエスの降誕である。ヨハネの筆致は、簡潔で美しく、詩的である。

テキスト

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であつた この書き出しに際して、ヨハネの念頭には天地創造の創世記1・1があつたであろう。ヨハネによる福音書の主題は人の新たな創造である。言(ギリ)ロゴス)

ヨハネはロゴスを普通の会話の言葉としても用い、イエスが語った言葉、神の言葉としても用いている。さらに重要なこととして、ロゴスはイエスそのものである。イエスは受肉した言葉であることをヨハネは独自に述べている。「初めに」という語はイエスの永遠性、すべての前にすでに存在されていた先在性を表している。1節後半は、イエスが神であること、父なる神との人格的な交わりを持つことを記している。ヨハネはロゴスという独自の表現で、キリスト論の根本を最初に提示している。早くも一世紀には、正統的なキリスト論をくつがえすグノーシス派の異端が入り込もうとしていた。今に至るま

で異端的なキリスト観は現れ、また消えていく。

3 すべてのものは、これによってできた 創造者は父なる神であると考えがちであるが、創造のわざはイエスとの共働でなされた。神は「光あれ」との言葉を最初に、言葉によって創造の業をなされている。全宇宙は神の言葉(ロゴス)であるイエスによって創造された。イエスは創造者であり、全宇宙の主権、統治、支配をお持ちのお方である。

4 この言に命があつた 命(ギリ)ゾーエー) 新約聖書で命と訳される語はゾーエーとプシユケーに大別される。共に、様々な意味を持つているが、地上の命を越えた、永遠にいたる神からの命はゾーエーに含まれている。イエスは神からの命を持ち、人に分かち与えるお方、霊的な命の源泉である。ヨハネは神からの命を巡って、この福音書を記している。この命は人の光であつた 光(ギリ)フォース) 聖書は神の栄光の輝きを記す。光は神の本質である。神は光を照らし、光を示すお方である。イエスは光としてこの世に来てくださり、光に従う者に神からの命を与えて、光に生きる者としてくださる。

5 光はやみの中に輝いている ヨハネは霊的な意味合

いでのやみを語る。神と離れるならば、やみは深くなる。罪は暗やみに属し、悪の力はやみの力である。やみはこれに勝たなかった イエスの光は、どんなに深く、濃いやみをも照らす神の光、命の光である。

9 すべての人を照すまことの光 まことの(ギ)アレーシノス) 人についても用いられるが神の本性として多く用いられる。すべての人を照す イエスは全人類を照らす光である。イエスの光は十分であるが、残念ながら光に背を向け、光よりも闇を愛する者もいる。

10 彼は世にいた。世は彼を知らずにいた イエスがクリスマスにこの世に生まれる以前に、人の目には見えないうが世におられたことを示す。もし人が創造された世界、万物の秩序と支配に心を向けるならイエスを知ることができた。

11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった イスラエルの民は神に選ばれ、律法が与えられ、恵みの約束の内にあった。預言の成就として、ユダヤに救い主イエスは生まれた。イスラエルの民はイエスを信じることなく、拒み、十字架に付けた。

12 彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々

「自発的、意志的にイエスを信じる者ならだれでも」という意味である。受け入れることは信じること、信じることは受け入れることである。神の子となる力 力(ギ)エクスーシア) 本来、力と訳すべきではない。特権(新改訳)、資格(新共同訳)の方が正確である。神の子とする力ではなく、神の子とされる特権が語られている。

13 血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず 先祖にだれかを持つということではない。人間の力でも、努力でもない。ただ神への信仰によって、新生の恵みに与るのである。

14 言は肉体となり 神の言葉である方が、罪以外はすべてにおいて私たちと同様の人となった。神であり、人である唯一のお方である。宿った(ギ)スケノー) 本来、天幕を張るという意味である。他に黙示録で四個所用いられている。わたしたちはその栄光を見た イエスは多くの奇跡をなさったが、特にヨハネが見た山上の変貌(へんぼう)をさすのであろう。めぐみとまことに満ちていた イエスは律法を越えた、恵みの福音という真理を表された。

参考図書 G. R. Beasley-Murray (WBC), Leon Morris (NICNT) 他

聖書

ヨハネー・15、9、14

タイトル

すべての人を照らすことの光

暗唱聖句

すべての人を照らすことの光があつて、
世にきた。
ヨハネー・9

目標

心の闇を照らし、救いきよめるイエス様
を、心に信じ受け入れる。

導入

(松浦みち子)

二〇一八年9月6日に、北海道胆振東部地震いぶりちぶが起こりましたね。新聞の第一面に、山々が地すべりした様子の写真が載っていて、人間の力では及ばない自然の力の威力に驚いたことを思い出します。中でも、この地震で忘れられない出来事は、北海道全域が停電したことでした。真つ暗闇の中で皆さんは、どんなに不安だったことでしょう。病院でも入院患者さんのための手当てが停電したため、命を落とした方もあったと報道されていました。そんな中、心に残るホッとしたニュースも流れました。セブンイレブン、ファミリーマートなどのコンビニエンスストアは電気が止まって営業ができない中、北海道を地盤とするセイコーマートだけが、地震の

起こった6日もほぼ全店で営業を続け、温かいおにぎりや惣菜を提供して、お客さんに対応したことが報道されていました。なぜ、店を開けることができたのか。それは、このセイコーマートは、常日頃から緊急時に備えて、各店に自家製の発電機を備えていたからでした。被災地の方はどんなに嬉しかったことでしょうね。

すべての人を照らすことの光

わたしたちの人生にもある日突然、真つ暗闇なできごとが起こることがあるかもしれません。備えがなければ、真つ暗闇の中でどうすればよいのか困ってしまいますね。そんな時、小さなろうそくの光でもあれば、わたしたちはほっとし、生きる力が湧いてきます。さらに、不安な心を照らし、闇を取り除くことの光が心のうちに照らされるなら、そこからわたしたちは抜け出すことができるでしょう。

「まことの光」といえる光が、この世に存在するのでしょうか。いろいろの生き方の本が出版されたり、勉強の手助けをする参考書、また生きる手助けをするサプリメントや栄養ドリンクが売られていたりしています。しかしそれらは、一部の人には有効かもしれませんが、すべて

には通用しませんね。イエス様は、すべての人を照らすまことの光としてこの世に誕生して下さった唯一のお方です。時代を越え、地域を越え、人種を越え、老若男女を越え、すべての人の命の光として誕生されました。

光が世に来る

イエス様の誕生は、イエス様が生れる700年ほど前から預言者を通して預言されていました。王宮ではなく小さな村の片隅で、神様を信じる心の清い処女から生まれると預言されていたのです。その預言の通りに、生けるまことの神様が、人間の赤ちゃんとなって、ベツレヘムの馬小屋で誕生されたのです。暗くて臭い馬小屋は、罪に汚れた人間の心、この世界と同じです。しかし、そこに聖い神のひとり子イエス様が、世界中の人の心の暗やみを照らすまことの光となつて生れてくださったのです。聖書は言います、「すべての人を照らすまことの光があつて、世にきた」。これはイエス様の誕生を示します。

「彼は世にいた。そして、世は彼によつてできたのであるが、世は彼を知らずにいた。彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった」と。

これは、誕生された赤ちゃんが、天地創造の時からこ

の世におられた神ご自身であり、この方の言によつて世界が造られたことを示しています。そして、ご自分のうちに命をもち、闇の中に輝く、人の光であられました。にもかかわらず、世の人々は、この方を知ろうとせず、また、受け入れ認めようとしなかったのです。しかし、幸いなことに、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、神の子となる力を与えたのです。それは、その人の血すじや肉の欲にはよりません。ただ神の恵みによつて、神の子の特権が与えられ永遠の命に生きる者とされるのです。なんと素晴らしい恵みでしょうか。

小学校4年生の夏、突然脳性小児麻痺になり、手足の自由を奪われたばかりか、ものも言えない、瞬きしかできない水野源三さんは、こんな詩を綴っています。

「わたしのようなもの」

主イエス様の御姿は見えない／御声は聞こえない／
だけど／わたしのようなものが／喜びにあふれ／
望みにみちて／生きている

♪もろびとこぞりて♪（こ28、ホ30、イン24他）

聖書 ヨハネ3・16～21 テーマ 最高のプレゼント

序論

(福井文彦)

今日の聖書箇所は、福音書の要約であり、聖書の真理がこれに集約されています。ここに聖書の中の聖書と呼ばれる16節が含まれています。その16節を要約すれば、「救い主キリストを神からのプレゼントとして信じ受け入れるなら、永遠の命を得ることができる」との約束なのです。

一、神は、世を愛された

〈神は…この世を愛して下さった〉と、神の愛の対象は〈この世〉です。〈この世〉とは神の選民イスラエルだけでなく、時代も民族も越えた全人類のことです。その〈この世〉は神に愛されるだけの価値があったのでしょうか。まったくありませんでした。なぜなら、神を知らず、いやむしろ神を否定し、無視し、背を向け、信じない世界が〈この世〉だからです。神を否定し、信じない人間は、神の代わりに、被造物を神と崇める者となり、それが自己中心性となって表れるのです。

その結果、具体的な罪を犯す者となりました(マルコ7・20～23、ローマ1・28～32)。人は罪を犯すから罪人ではなく、生まれながらの罪人であるから罪を犯すのです。ですから、〈この世〉は「罪の世」であり、「汚れた世」です。その「この世」を、それにもかかわらず、神は愛してくださったのです。ここに無条件の愛を見ます。人間の愛は「もし…ならば」の条件付きの愛です。しかし、神の愛は、「にもかかわらず」の、無条件で絶対的な愛です。ですから、この神の愛の対象から漏れる人は一人もいません。

二、ひとり子を賜ったほどに

神は無条件の絶対的な愛で〈この世〉を愛されたのです。それは人が神から離れていても、神に敵対する者であっても、変わることなく愛する愛です。さらに驚くべきことは、〈神はそのひとり子を賜ったほどに〉愛してくださったのです。この〈賜る〉という言葉は、殿様が家来にご褒美を与えるような意味にとられますが、これは、実は「お捨てになった」ということなのです。それは、〈賜る〉のギリシャ語「デイドーミ」には、「明け渡す」という意味があるからです。つまり、「神はひとり子を

お捨てになったほどにこの世を愛して下さった」ということなのです。神は愛の対象、喜びの源であるひとり子イエスを犠牲にしてまで、「この世」を愛されたのです。

そのイエスが、「モーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない」(14)と語られました。これは、明らかに十字架のことを意味しています。ですから、神がひとり子をお捨てになった犠牲とは、イエス・キリストの十字架のことです。神は、一つの罪も少しの汚れもないお方、捨てられる理由の全くないひとり子を十字架におかけになるほどに、この世を愛されたのです。

三、御子を信じる

神はなぜ、それほどまでのことをされたのでしょうか。ひとり子を十字架にかけるほど、世、すなわち私たちを愛して下さった、その愛は私たちに何をもたらしたのでしょうか。それは、

① 永遠の滅びからの救いです。永遠の滅びとは、永遠の刑罰です。その世界は神との交わりのない世界、愛の温度の一度もない、慰めのかけらもない世界、一筋の光さえない暗黒の世界、それが永遠の滅びです。この永遠

の滅びは、確実に、すべての人に来ます。しかし、イエス・キリストの十字架の救いは、この滅びから私たちを救います。

② 永遠の命への救いです。永遠の命とは、ただ単に寿命がいつまでも続くというのではなく、死に打ち勝つ命であり、全く質の違う、永遠に神のもとにあり続ける人生に導き入れてくれる命です。それは、イエス・キリストの復活と同じ復活にあずかることです。

その命を得て自分のものとするために必要なことは、悔い改めと信仰です。①心の罪、言葉の罪、行いのあやまちでも、正直に認めて神に告白することです(イヨハネ1・9)。
②もう一つは、イエス・キリストが自分に代わって死んで下さったことを信じることです(ローマ10・9)。

結論

神の愛のゆえに、キリストによって世界のすべての人々に救いの扉が開かれています。すなわち、救いは世界のすべての人々のために備えられています。それゆえこの世の中のどんな人でも、キリストを信じ受け入れるなら救われるのです。

研究資料

(井上義実)

聖書の最高峰、聖書の中の聖書と呼ばれるヨハネ3・16を含む文節である。イエスがニコデモに語られた直後に記されている。イエスが語った言葉の続きなのか、ヨハネの説明なのか問われる。イエスとニコデモとの会話を受けて、ヨハネが救いについて記したと考えることが妥当であろう。

テキスト

16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さったひとり子(ギ)モノゲネース) 形容詞であり、単数形の息子(ギ)フィオス)と共に一人という唯一性が、強調されて用いられている。英訳聖書(NIV)では、ワン・アンド・オンリー・サン(一人にして唯一の息子)と訳している。イエスが賜物として、この世に与えられたのは、神の愛の結果である。神の愛は、人が神から離れていても、敵であったとしても変わらなく愛される愛である(ローマ5・6・8参照)。神の側から、一方的な愛としてイエスを送られた(1ヨハネ4・10参照)。(ギ)世(ギ)コスモス) 新約聖書中186回用いられて

いる。ヨハネ福音書に78回、ヨハネの手紙に24回、ヨハネの黙示録に3回、ヨハネは計105回この語を用いている。ヨハネはこの世についての詳細な考察を行なっている。この個所で、この世とは、時代も民族も越えた全人類を指している。神の愛に与^{あずか}れない人は一人もないということである。神に反する忌むべきこの世ではなく、神の慈しみによって救われるべきこの世である。御子^{みこ}を信じる者 「信じる」(ギ)ピステウオー)は現在分詞能動態で記されている。イエスへの信仰は現在のみならず将来も信じ続けることである。人が持つ自発的、能動的、意思的な信仰であることが解る。滅びない 「滅び(る)」(ギ)アポリューミ)とは永遠の滅亡を指している。永遠の命との対比で記されていることが多い。この文脈で強調されるのは、永遠の滅びではなく、永遠の救いである。永遠の命 ヨハネ福音書の主題である。イエスによる救いにあるものは信仰によって現在すでに、死から命に移されている(5・24参照)。イエスによって与えられる神の命は、信じた時点より始まり、永遠に及ぶものである。17 世につかわされた 「つかわ(す)」(ギ)アポステロー) ヨハネ福音書では、イエスが神から遣わされたと記す個

所が38箇所ある。イエスの使命が神からのものであることが示される。他の福音書に比べて特徴的である。世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。「さばく」(ギクリノー)と訳された語は、広い意味を持つ言葉であるが、終末に不義に定めるという意味も持つ。ユダヤ的思想ではメシヤは義をもつてさばくために来臨するという考えがあった。イエスがこの世に降誕されたのは、人をさばき、滅びに定めるためではない。16節では永遠の滅びではなく、永遠の命を持つために救いを備えられたことが語られている。本節ではイエスが人をさばくのではなく、人を救い、永遠の命に生かすために来られたことが記されている。しかし、再び来られる再臨のイエスには、義とさばきという面が強く表される。

18 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている イエスを通して神を信じることに、信じないこととの差異は非常に大きい。信じる者はさばかれず、信じない者はさばかれる。そのさばきはすでになされていることが示されている。さばかれないイエスを信じる者はさばかれない。信仰によって義とさ

れた義認の結果である。義認は十字架でなされたイエスのあがないを信じることに始まる。神は完全な罪の赦しを与えてくださり、罪の刑罰から解放してくださる。信じる者を義であると宣言され、新しい神からの命に生かしてくださる。さばきにおいては「さばかれない」のであるが、同時に積極的な生に導かれる。さばかれている(ギクリノー) 完了形受動態で記されている。すでにさばきを受けており、なおさばきは継続している。イエスを信じないという決断と意思は、その人が生きている死んでいるという状態に関わらず、さばきに置かれ続けるのである。イエスを信じない者は生きていても、滅びの淵にあるのである。神のひとり子の名「名」(ギオノマ) 十戒にある神の名をみだりとなえてはならないとの戒めから、ユダヤ人は神の名を大切にした。ユダヤ思想では、名は単に区別のためにあるのではない。名は人格、力を宿すものとして受け止められた。イエスの御名は、イエスの性質、イエスの力を持つのである。イエスの名を信じることは、イエスのすべてを信じることである。

参考図書 12月15日分と同じ。

聖書

ヨハネ3・16〜21

タイトル

最高のプレゼント

暗唱聖句

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。ヨハネ3・16

目標

神様が送ってくださった救い主キリストを信じ、永遠の命を得る。

導入

(土屋開夫)

皆さん、クリスマスおめでとうございます！

ところで「クリスマス」と言えば「プレゼントをもらう日」と思っている人も多いかも知れませんね。それは間違いではありません。誰かからプレゼントをもらった、あるいは誰かにプレゼントをあげたり。今日はちょっとプレゼントについて考えてみましょう。

まず質問① 今まで誰かからもらったプレゼントで、一番うれしかったものは何ですか？

(お父さん、お母さん、お友達からもらったかな。)

じゃ質問② 次は、誰かにプレゼントをあげた事がありますか？ 誰にどんなものをあげましたか？ もらった人は喜んでくれましたか？

(例) 先生には二人の娘がいますが、ある時、小学生のお姉ちゃんが、妹の誕生日のために「クマのプーさん」と「ピグレット」のマスコットをフェルトで手作りしてプレゼントしたら、妹はとっても喜んでいました。

大好きな誰かのために、愛のこもったプレゼントをすると、あげる方も、もらう方もとっても嬉しいですね！「プレゼント」には、贈る人の「相手を思う心」が表れています。

そう、クリスマスは、父なる神様が私たちに「最高のプレゼント」をくださった、その事を喜んでお祝いする日なんです！

神様が与えてくださっているもの

「神は愛である」(1ヨハネ4・16)と聖書に書いてある通り、父なる神様は「愛」で満ち溢れたお方です。私たち人間のことを愛して愛してたまらないのです！

だから父なる神様は、私たちに素晴らしいものをどんどん与えてくださらないのです！

神様が与えてくださった素晴らしいものをちよつと数えてみましょう。

①まず、この広い宇宙全部です。神様の愛は大きくて広いですね。②そしてこの地球。宇宙で一番いい星を住まいとしてくださいました。③次に、太陽も月も、光も水も、植物も動物も、おいしい食べ物も、ゼーンぶ私たちが人間のために、神様は最も良いものを与えてくださっているのです。

「え？ 大事なものを忘れてるって？」そうですね、一番大事なものの、神様は私たちに「命」を与えてくださいました。まず素晴らしい「体」を造ってくださいって、そこに「命の息」を吹き入れてくださったのです！ 皆、お母さんのお腹の中で、神様から命の息をもらったんですよ。

最高のプレゼントとは

けれども、父なる神様の愛の贈りものはまだまだこれくらいではないのです！ 神様はさらに「これ以上のものは無い」という最高のプレゼントを与えようとされたのです！ 神様が私たちを愛する心が全部こめられた

「最高のプレゼント」って一体何でしょう？

そう、それが「神の御子イエス様」です！ 親にとって一番大事な宝ものは子どもです。という事は父なる神様にとって一番大事な宝ものは、ひとり子のイエス様です。

その一番大事なひとり子イエス様を私たちに与えるって?! もう神様の愛は、大きすぎてビックリ仰天です！ イエス様を「賜わる」とはどういう事かというと、①最高の愛を与えられること、②永遠の命を与えられること、③いつも共にいてくれる最高の友だちであり、愛して守って導いてくれる王様を与えられることです！

まとめ

この神様からの最高のプレゼントであるイエス様を受け取らないなんて、あり得ません！ あなたがイエス様を受け取るのは勿論、全ての人がこのイエス様を受け取るように祈りましょう！ それがクリスマスです！

♪もろびとこぞりて♪（こ28、ホ30、イン24他）

聖書 詩篇103・1～22 テーマ 神の恵みを覚える

序論

(福井文彦)

本詩はその題でダビデの作とされている、全詩篇でも最も美しい賛美の詩です。また、世界の多くの人々に知られている純粹な賛美の歌です。作者は神を畏れ敬う者への神の愛を告げています。

一、すべての恵みを心にとめよ

最初と最後に、「わがたましいよ、主をほめよ」と三度(1、2、22)繰り返されています。御霊に導かれた詩人が、全霊全生全身をつくして心の底より神を賛美するようにとの呼びかけです。私たちの魂は、主の恵みによって死から命に移されました。それで、「わがうちなるすべてのもの」が、「聖なるみ名」を賛美することができるのです。

「わがうちなるすべてのもの」が、「聖なるみ名」を賛美できるのは、「そのすべてのめぐみを心にとめ」ることから生れます。新改訳では「心にとめよ」が「何一つ忘れるな」と訳されています。「聖なるみ名」を賛美できる

のは、「すべてのめぐみ」を思い起こすことから生まれます。

〈すべてのめぐみ〉とは「主の良くしてください」と(新改訳)です。その核心は、主が今すでに、罪の赦しを与えてくださっていることだけでなく、将来的なすべての病のいやしのことです(3)。これは、「あなたのいのちを墓からあがないだし」た時、すなわち、私たちのからだの復活の時に、目に見える形で表されます(4)。すべての恵みの主を賛美しつつ生きるなら、〈若返って、わしのように新たになる〉(5、イザヤ40・31)歩みとなるのです。

二、神の恵みとあわれみ

6節からはイスラエル民族の歴史を振り返り、神の恵みとあわれみについて詩っています。

神は「正義と公正を行われる」お方です。そして、この「正義と公正」とは、「すべてしえたげられる者のために」行われます。具体的には、イスラエルを虐待するエジプトに対するさばきとして表されたのです(7)。

また、神は「めぐみふか」いお方です(出エジプト34・6、7)。「めぐみ」も「いつくしみ」も、ヘブル語の「へ

セッド」の訳です。神は、イスラエルを「愛し」（申命記7・8）、彼らと契約を結び、彼らに裏切られながらもご自身の約束に真実であられるお方です。

さらに、〈父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる〉愛に富む父なる神です。〈あわれみ〉とは、真実な「父」がその「子」に対していただく感情です。イエスはその「あわれみ」を、放蕩息子^{ほうとうしこ}を待つ父の姿を通して話されました（ルカ15・22）。

私たちは神の恵みのために、しばしば神を賛美します。しかし、そのご性質のため賛美することはまれです。恵みを喜ぶよりも、恵みの主ご自身を喜ぶことが大切です。

三、主の語りかけを聴きつつ生きる

イスラエルの野に咲く花は、驚くほど美しいと同時に短命です（15）。人の一生も草のようにはかなく、その栄えは野の花のように短いものです。しかし、愛なる神はそんな私たちの命を美しく輝かせることができます。その神の愛は永遠であり、過ぎ行くこの世のものではありません（17）。その対象者は、主の愛に満ちた契約を深く心で味わい、昼も夜も黙想し、心に留めて行う人です（18）。

最後に、19節から22節で、〈主をほめまつれ〉との賛美が繰り返されています。ただし、その勧めは、〈わがたましい〉から広げられ、主の使いたち、すべての万軍とすべての被造物にまで向かいます。その根拠は〈主はその玉座を天に堅くすえられ、そのまつりごとはすべての物を統べ治める〉ことを確信しているからです。

この世界には様々な矛盾、不条理がありますが、それは神にある完全な平和を生み出すための座みの苦しみにすぎません。この世界は、神にとって制御不能なのではなく、確実に完成に向かっているのです。主は、ご自身の〈み言葉〉によってこの世界を支配しておられます。その〈み言葉〉が私たちにも与えられています。それこそが、私たちを〈すべてのめぐみ〉に満ち足らせてくださる神の御手のわざの根本です。

結論

全身全霊で主をほめたたえる者の魂は、驚く^わように新たにされ、命の輝きが生まれます。私たちの心の底にある「渇き」を真の意味で満足させてくださる方は、愛とあわれみの主ご自身なのです。

研究資料

(井上義実)

バックストン師はこの詩篇に、「賛美すべき勧め」(詩篇の霊的思想)という表題を付けている。ダビデの作である。愛なる神を表す美しい詩篇として知られている。

テキスト

1 わがたましいよ、主をほめよ ほめよ(ヘ)バーラク
 本篇には「主をほめよ」という勧めが五回記されている。神に賛美をささげる理由が説明されていく。わがうちなるすべてのものよ 自分の持てるすべてのものをもつて賛美すべきお方である。聖なる(ヘ)コーデシユ 語源の一つには「明るい」、「輝く」が示唆される。神の栄光、火が関連づけられる。もう一つは「分離」が考えられ、聖別との関わりが指摘される。神がきよいお方であることは、神の道徳的な性質の根本にある。み名(ヘ)シェーム) 十戒にある神の名をみだりとなえてはならないとの戒めから、ユダヤ人は神の名を大切にした。ユダヤ思想では、名は単に区別のためにあるのではなく、人格、力を宿すものとして受けとめられた。

3~5 この3節の間に六つの恵みが記されている。①

すべての不義をゆるし(3) 不義(ヘ)アウオン) 悪

を行なうという意味で、意識的な悪を表す。刑罰とも訳

され、償いが伴うことが解る。不義がゆるされる。②す

べての病をいやし(3) 神はあなたの肉体を造られ、

あなたの魂を造られた。神は自らの造り成したものを、

いかに再生するかをご存知である(アウグスチヌス)。

③いのちを墓からあがないだし(4) 墓(ヘ)シャチャ

ス) 本来、穴という意味であり新改訳はそうのように訳

出している。英訳聖書(KJV)は破壊と訳したが、神

は肉体の死、霊的な死からもあがない出される。④いつ

くしみと、あわれみ(4) いつくしみ(ヘ)ヘセッド)

語意は広く、「愛」、「あわれみ」、「恵み」などとも訳され

る。契約関係での忠誠を示す意味があり、神の愛の契約

に関わる。あわれみ(ヘ)ラハミーム) 元々、親子、兄

弟にあるような近親的情愛が原意にある。いつくしみと

同様、契約の概念が含まれている。感情的なものではな

く、正義と公平と共に表される。⑤あなたを飽き足らせ

られる(5) 飽き足らせられる(ヘ)サーバ) 願い、

求めに応え、良きもので満たされる神である。⑥若返っ

て、わしのように新たになる(5) 猛禽類のわしは、

体も大きく、力強く、高く飛翔することができる。体の小さな鳥よりも長命である。神からの命、力が、わしの生命力にたとえられている。神の恵みによって、新たな力をいただくことができる（イザヤ40・31）。

6 主は…正義と公正を行われる 5節までは作者ダビデの個人的な救いの体験、恵みの証しが記されている。6節からは、イスラエル民族の恵みの証である。主はイスラエルの歴史を通して、正義と公正を表された。

7 主はおのれの道をモーセに知らせ モーセは神に進むべき道を尋ねた（出エジプト33・13）。モーセがシナイ山に登った留守中、偶像崇拜に陥った民を、神が見離そうとされた時であった。モーセの祈りに応えられて、神は民を見捨てられず、カナンへの道を示し続けられた。

8～9 主はあわれみに富み、めぐみふかく、怒ること遅く、いつくしみ豊か…主は常に責めることをせず、また、とこしえに怒りをいだかれない 言葉どおりであり、何ら説明の必要がない。慈愛に富む神の性質は、イスラエルの全歴史を通して表された。

11 天が地よりも高いように 時代と文化が違う私たちには過大な表現に思える。他にも詩篇36・6、57・5な

どが挙げられる。ダビデの神を知る体験の深さ、培われた信仰の豊かさのゆえであろう。

12 東が西から遠いように 前述と同じように、非常に大きな表現である。神がなさることは、そこまで徹底されるのが解る。

13 主はおのれを恐れる者をあわれまれる 13節からは歴史上のことではなく、現在の恵みが語られている。

15 よわいは草のごとく 草（ヘシール） 青草、若草とも訳出。草は雨期には見られるが、やがて枯れる（ヤコブ1・11）。草は人の命のはかなさにたとえられる。その

栄えは野の花にひとしい 花（ヘペラー） も雨期が終わると一斉に咲く。その後の日差しや熱風ですぐに散ってしまう。人の世の栄華の空しさにたとえられている。

17 主のいつくしみは、とこしえからとこしえまでいつくしみ（ヘセツド） 4節で述べたように、神は人との契約を守り、約束の愛を表し続けるお方である。神の愛は永遠から永遠にいたるものであり、過ぎ行くこの世のものではない。神をほめよ、との賛美が繰り返される。

参考図書 Keil-Deitzsch, Commentary on The Old Testament, Vol. 5 (Erdmans) 他

聖書

詩篇103・1～22

タイトル

神の恵みを覚える

暗唱聖句

わがたましいよ、主をほめよ。

そのすべてのめぐみを心にとめよ。

詩篇103・2

目標

一年間の神の恵みを覚え、神を賛美する者となる。

導入

(土屋開夫)

今日は今年最後の礼拝です。今年も一年間、神様から毎日たくさん恵みをいただいて歩んできました。たくさんあり過ぎて、もう忘れちゃった恵みもいっぱいあると思います。でも今日は出来る限り思い出して、改めて神様に感謝しましょう！ 神様の恵みを感謝する事は、神様にとっても、私たちにとっても、最も素晴らしい事です！ I テサロニケ5・16～18にも「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。」とある通りです。

思い出のアルバム

ところで皆さん、この歌を知っていますか？

♪いつのことだか 思い出してごらん

あんなこと こんなこと あったでしょう

うれしかったこと おもしろかったこと

いつになっても忘れない♪

そう「思い出のアルバム」という曲ですね。先生も保

育園の卒園式で歌いました。

まずはこの曲の替え歌を作ってみました。良かったら

歌ってみてください。

♪春のことです 思い出してごらん

あんなこと こんなこと あったでしょう

死からよみがえった イエス様のイースター

救いの恵み ありがとう

夏のことです 思い出してごらん

あんなこと こんなこと あったでしょう

山や川や海で 主を賛美した

自然の恵み ありがとう

秋のことです 思い出してごらん

あんなこと こんなこと あったでしょう

栗や梨やブドウ 柿におイモにサンマ

おいしい収穫 ありがとう

冬のことです 思い出してごらん

あんなこと こんなこと あったでしょう

クリスマス 神の 御子をくださった

愛のプレゼント ありがとう

一年中を 思い出してごらん

あんなこと こんなこと あったでしょう

すばらしい天国 備えられている

もうすぐイエス様 迎えにくるよ

一番の恵みは

名曲がさらに素晴らしい感謝の賛美になりましたね！

この他にも神様の恵みはみんなにたくさん注がれたこと
でしょう。

でも、神様の恵みの中で一番の恵みは何でしょう？

今日の中心聖句、2節「わがたましいよ、主をほめよ。
そのすべてのめぐみを心にとめよ。」

この後に一番の恵みが書いてあります。

3〜4節「主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたの
すべての病をいやし、あなたのいのちを墓からあがな
いいだし：」

これは、私たちの罪が赦されて、イエス様の十字架に
よって、私たちの命が死から買い取られたこと、永遠の
命が与えられた「救いの恵み」を表しています！

つまり最大の恵みはイエス様によって救われている、
という恵みです！ これは今年も、来年も、再来年も、
ずっと一番に感謝すべき恵みです！

そして、救われているからこそ、5節にある通り、「あ
なたの生きながらえるかぎり、良き物をもって あなた
を飽き足らせられる」のです。

今年もあと三日。「神様、イエス様、感謝します！」と
感謝のお祈りや賛美をしながら過ごし、来年の新しい恵
みを待ち望みましょう！

♪ワワワいっしょに♪ (PW6)

牧羊ひろば



舞鶴福音教会 教会学校

●はじめに

舞鶴福音教会は一九八七年の創立から32年目を迎えました。これまでの教会学校の歩みを紹介させていただきます。

●教会学校の移り変わり

創立当初は、舞鶴教会時代からの生徒（クリスチャンホームと一般家庭の子どもたちが同数くらい）でスタートしました。当時は青年会が活発に活動しており、中高生を加えた青年会を中心として、教会全体で子ども大会や餅つき大会など外に向かっての活動も盛んでした。

隣の子どもたちが来てくれるようになりました。ところが、突然その子どもたちが来なくなったのです。理由は、地域にあるスポーツ少年団でした。教会学校に来てくれていた子どもたちはそのスポーツ少年団にも属しており、

教会学校が終わってからスポーツ少年団に駆けつけていたのですが、教会学校の終了時間よりスポーツ少年団の開始時間が若干早いため、どうしても遅刻をしてしまうのです。そんな子どもたちにスポーツ少年団のリーダーから「どちらか1つにしなさい」と指導があり、子どもたちはスポーツ少年団を選んだのでした。



’88いも掘り

当時の教会学校のプログラム

8時15分～ 礼拝

8 時 45 分 ～ 分級

9 時 00 分 ～ ビデオ『聖書物語』

子どもたちは『聖書物語』を楽しみにしていました。対応策を検討しましたが、開始時間を早めることもできず、対策は何も取れませんでした。そのような状況になった教会学校でしたが、次第に若い家族に子どもがあらたえられ、教会学校はクリスチャンホームの子どもたちで賑やかになっていきました。教会で共に育った子どもたちは、大人になった今でも本当の兄弟のように仲がいいです。



’90夏期学校

●お楽しみ会

4年目の一九九一年から、月一回・土曜日に「お楽しみ会」を始めました。当初は「こども映画会」として、『聖書物語』と子ども向けビデオの上映会で日曜日に来ることができなくなった子どもたちが教会に来る機会を作るためでもありました。当時は家庭でビデオを大きな画面（スクリーン）で見ることが珍しかったこともあり、教会学校に来たこともない子どもたちもたくさん来てくれました（100人を超えたこともありました）。

9年目となる一九九六年、名称を「こどもお楽しみ会」、内容を『聖書物語』、シヨートメッセージ、お楽しみゲームまたはおやつ作り）に変更し、神様の言葉を子どもたちに伝える時間と交わりの時を持つようにしました。開催は春・夏・秋のシーズンごとに減りましたが、教会学校の生徒だけの「クリスマス会」が多くの子どもたちが集う「こどもクリスマス会」に変わりました。

毎回十数人の子どもたちが集うようになり、この機会を増やそうと二〇〇一年から開催を毎月とし、内容の見直し（シヨートメッセージ後に分級を追加、お楽しみはおやつ作り）をしました。また、ビデオばかりではなく、

紙芝居（大きく映し出し、登場人物を教師に配役）を始めました。これも子どもたちに大人気！ 来てくれる子どもたちは年間で延べ250人までになりました。現在では年間150人ぐらいに減りましたが、メンバーが固定化されてきています。

二〇一八年度のお楽しみ会

4月、春のこともお楽しみ会

（DVD『泣いたベテロ』、餅つき）



春のお楽しみ会

5月、こどもお楽しみ会

（紙芝居「ころちゃんのおうち」、ポップコーン）

6月、夏のこどもお楽しみ会

（DVD『生贄は息子』、かき氷）

7月、夏期学校



夏期学校

9月、こどもお楽しみ会

（DVD『フアの箱舟』、アイスクリーム）

10月、こどもお楽しみ会

(紙芝居「ろうそくものがたり」、ホットケーキ)

11月、秋のこどもお楽しみ会

(DVD『君の足を洗わせて』、秋祭り)

12月、こどもクリスマス会



こどもクリスマス会

1月、こどもお楽しみ会

(DVD『金の子牛か、神の約束か』、クレープ)

2月、こどもお楽しみ会

(DVD『長男対次男 一番争い』、たこ焼き)

3月、6年生卒業お祝い会

月一回ではありますが、土曜学校的な働きになっているのでは感謝です。ただ、そこから日曜日の教会学校に來てくれる子どもがなかなか起こされません。日曜日の朝となると、家庭の理解と協力が必要だと痛感します。会社で同僚に日曜日の起床時間を聞いてみたところ、「予定がないと目が覚めるまで寝ている」とのことでした。日曜日でも6時過ぎには目覚めてしまう習慣がついてしまった私には羨ましい話でしたが、そのような環境の中で、子どもたちが自分で起きて教会学校に來ることは本当に難しいことでしょう。

●教会学校の状況

信徒に若い世代のクリスチャンホームがないこともあり、5年前(二〇一四年)、教会学校の生徒が中学に上がることに、生徒がいなくなるという危機を迎えました。ときどき來てくれていた小学3年生たちも休みがち

で、その年の後半は誘っても来てくれない状況でした。年度末の教師会で話し合い、牧師の「少し休んでみれば」との言葉で休校が決まりました。これまでも参観日や運動会の日など学校行事のある日は、教師だけで礼拝を捧げていましたので、教会学校は新年度から休校となったものの、私は「やっぱり教師だけでも」と教会に行くつもりでしたが、週末、牧師夫人から電話があり、「私が子どもたちを迎えに行くので教会学校は続けます」とのことでした。一年間は生徒1人（ときどき0人、まれに2人）の状況が続きましたが、牧師の転任が決まりました。新任牧師家庭の子ども2人を迎え、生徒3人となりましたが、今は、牧師家庭の子ども2人のみとなりました。

現在の教会学校のプログラムは次のとおりです。

- 8 時 30 分 教師の祈り会
- 8 時 45 分 ゲーム
- 9 時 00 分 礼拝
- 9 時 30 分 分級

二〇一九年度のお楽しみ会も、スタートしています。5月の「こどもお楽しみ会」は、学校行事の関係もあり、来てくれた子どもは過去最低の4人でしたが、子どもが少ない分十分な交わりを持つことができ、おやつ後はゲームで盛り上がりました。そして次の日の日曜日、2人の男の子が教会学校に来てくれました。礼拝も終わり、分級を始めようかとしていた時でしたが、それでも来てくれたことを嬉しく思いました。残念ながら翌週からは、来てくれなくなりましたが…。

●これからの教会学校

何度も内容を見直し、試行錯誤の中で続けてきました「こどもお楽しみ会」ですが、これからも続けていくことになるでしょう。この「お楽しみ会」からすぐに教会学校に繋がることなくとも、教会の中には入ったこと、神様の愛に触れたことは、子どもたちに将来にきつと大きなものになるでしょう。

これからも私たちCS教師一同は、子どもの救霊のために祈りを絶やすことはありません。

（熊野純二）

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

おわりに

『牧羊者』二〇一九年度第Ⅲ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

巻頭言は京都聖徒教会の船田猷一師に執筆していただきました。教師養成講座は長田栄一師が二〇一二年度第Ⅳ巻に執筆してくださったものを再掲させていただきます。「牧羊ひろば」は舞鶴福音教会のCSを紹介していただきます。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

聖書講解

石田高保師 小泉 創師 高橋頼男師

研究資料

福井文彦師 金井信生師 金井由嗣師

メッセージ例

宮澤清志師 辻林和己師 中島啓一師

ワーク(A)

加藤 満師 井上義実師 土屋開夫師

(B)

松浦みち子師 飯田勝彦師 宇野真佑美師

(C)

鎌野 幸師 吉田美穂師 竹崎光則師

中高科へのヒント

山下大喜師 三輪直子師 勝田幸恵師

子ども聖書日課

勝田幸恵師 田中裕明師 石田高保師

フラッシュカード

八幡直人師 三輪正見師 小野淳子師

み言葉カード・イラスト

丹羽 遥師 金田ゆり師 後藤栄子師

ワープロ打ち込み

加藤 満師 松浦あん姉 後藤栄子師

校 正

多田豊子師 中島啓一師 加藤 満師

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者 二〇一九年度 Ⅲ巻

二〇一九年一〇月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団・信徒局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団・信徒局 教会教育室

神戸市兵庫区塚本通三三一九
電話 (078) 575-5511

FAX (078) 575-5511
印刷所 菱三印刷株式会社

電話 (078) 576-1396
* 日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み